北支

現地編輯



特輯　回教及び回教徒

9 4



回教徒

大東亞諸民族を指導して各〻其の處を得せしめんとする我々は、今や回教及び回教徒の何たるかに就いて無智であつてはならない

大東亞共榮圏に包含せらるべき回教徒の數は實に莫大であり、彼等を輕視して共榮の基礎を少しでも脆弱にするやうなことがあつてはならない

戰爭遂行に必要なる資源の開發は治安を必要とし、治安は民心の動向に歸するのである。彼等の心からなる協力はいま我々の欲するものである

最近回教問題の重要性について、我が國の朝野の間に著しく認識の度が高まりつゝあることは、正にさうあるべきが當然であつて、今日までそれが無關心に放置せられてあつたといふことはむしろ恥づべきことである

いま世界地圖を繙いて回教圏の占むる廣大なる地域とその重要なる地位を觀るならば、回教徒の動向を無視するわけにはいかないのである

アラビヤに發生して其處を中心に殆んど全世界に擴がる約三億五千萬の教徒は他の宗教（例へばキリスト教、佛教等）に見られない獨特な宗教的紐帶に結ばれて、民族を越え國境を超越した統一ある精神的團結を形成してゐるのである。從つて或地域に於ける回教民心の離叛は、それが直ちに全回教圏に波及して、世界回教徒全體の民心の喪失を結果する可能性が多分に存するわけである

夫々の個性を有する東亞諸民族を收攬して、强堅なる共榮圏を確立すべき我我は、回教徒對策に於ても、現在までの實例多き前者の失敗を輕率に再演してはならない

ドイツ皇帝カイゼルが所謂三B政策に失敗したのも、歐洲近東の回教徒に對する目算を誤つたからだとも云はれ、大英帝國が、今日悲慘な崩壞の過程を急ぎつゝあるのも、見樣によつては前大戰以來の對回教圏欺瞞政策の當然の應報とも云へるのである

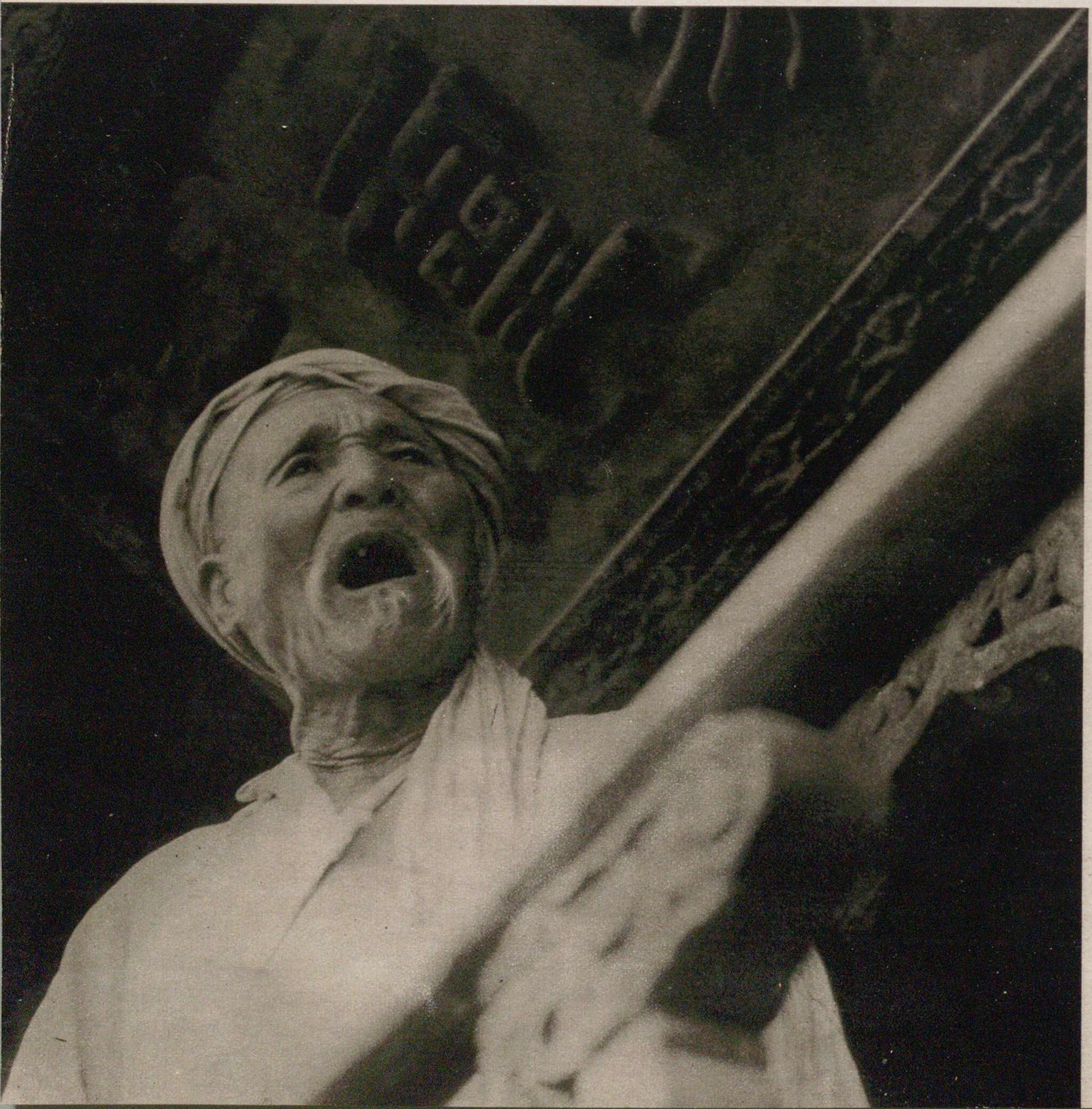
ソ聯、和蘭、佛蘭西、アメリカ等も皆其の例に洩れぬのである

今や回教圏の重要なる一環が既に我が共榮圏の傘下に入り來つた今日、これと有機的繋りを有つ他の回教圏に對する敵國の動向を監視し、傘下回教徒の指導に萬遺漏なきを期し、以て堅牢なる協同體を建設して、これを我等の子孫に受け繼がせねばならない



アラーは至大なり〳〵
アラーは至大なり〳〵
我はアラーをおきて
　崇むるものなきを誓ふ〳〵
我はマホメットが
　アラーの使徒なるを誓ふ〳〵
（右を向いて）いざ禮拜に參ぜよ〳〵
（左を向いて）いざ禮拜に參ぜよ〳〵
アラーは至大なり〳〵
アラーの外に神なし

禮拜の時間が來ると、寺院の觀月樓（ミナレット）上から朗々たる聲で教徒に呼びかける





回教徒

支那西北地方は抗戰重慶に殘された唯一の輸血路である。同時にまた一千萬の回教徒の居住地帶でもある

從來重慶政權は回教の中央化政策によつて、彼等を壓迫し續けて來たのである。中國共產黨もまた回教とは根本的に相容れない性格を持つてゐるのであるが、蔣介石の中央軍によつて回教地帶である西北地區へ迫ひ込まれた中國共產黨にとつては回教民心の喪失は全く自殺に等しい關係にある

よつて共產軍は生きんが爲に、表面百八十度の轉換をし、信仰の絕對自由とか、參政權の容認とかの好餌を與へて各地回教民を引きつけ、武裝團體や各種救國會等の組織に成功し、軍需輸送路の確保に、或は情報の蒐集に或は後方攪亂等に彼等を動員活躍せしめてゐるのである





讀めよ、いと高き神、
その筆もて敎へたまふ、
人のかつて知らざりし
ことを敎へたまふ

（コーラン九六、三―五）

回敎徒の遵奉するコーランは聖なる書であり、それは「讀誦さるるもの」の意味であつて、日常生活の規律である

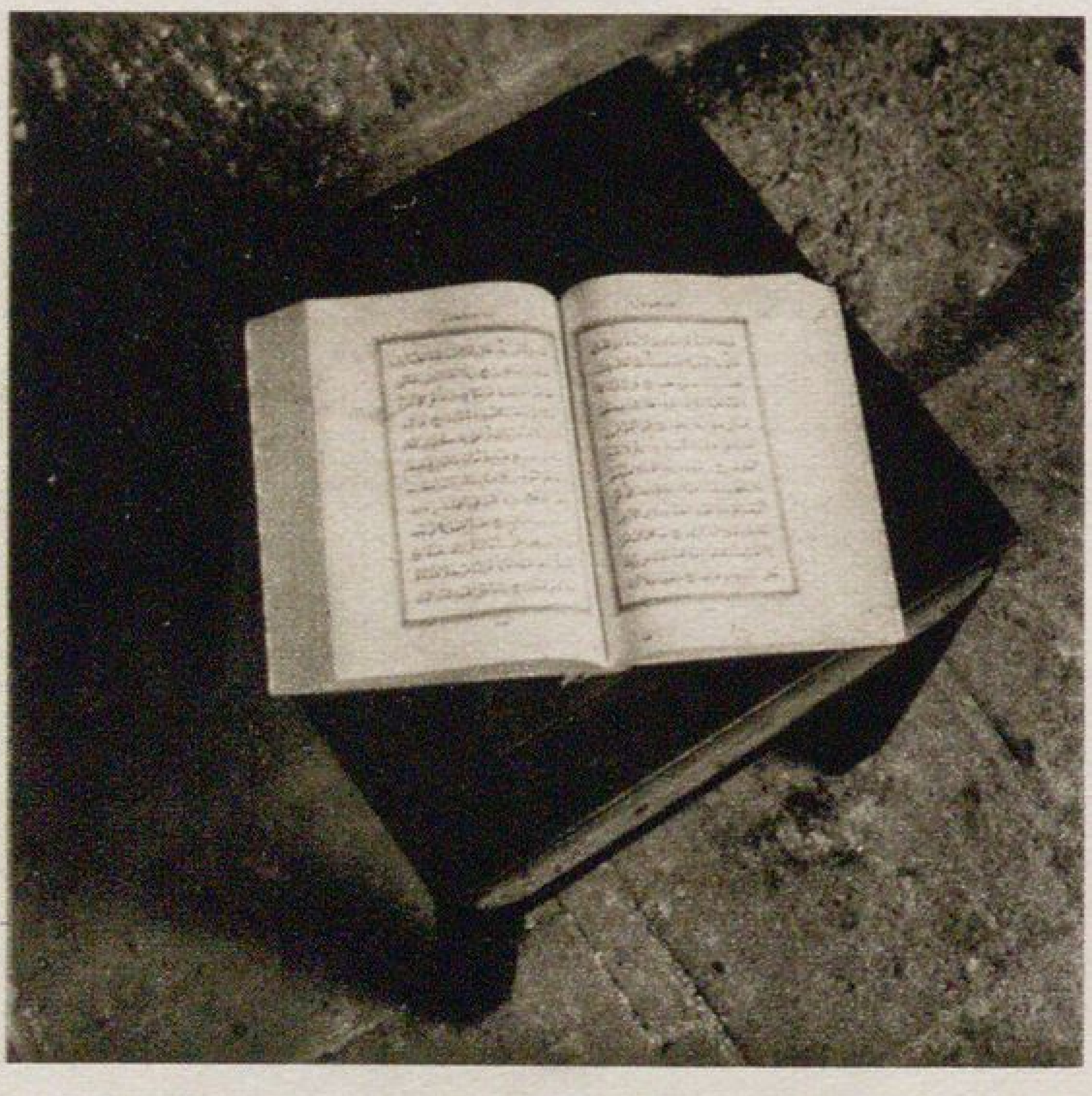
アラビヤ語で書かれ、三十卷百十四章六千六百十六節三十二萬三千六百七十一字より成る。コーランに記された啓示のすべてがマホメットの在世中に集錄されたものではなく、マホメットの後繼者アブー・バクル、及びウスマーンによつて集大成されたものである

寫眞右は北京福長街淸眞寺に於ける敎徒の讀誦、左は阿衡（アホン）の讀誦、下はアラビヤ語のコーラン

しかしながら、これを注視すれば、眞主アラーに歸依する回敎徒が、最後に共產軍と運命を共にするものではないことは容易に觀取されるのである

曾て四川から追はれた共產軍は陝甘地區への遁入に際し、回敎寺院の大破壞を敢行し、更に阿衡（アホン）（敎長）を慘殺し聖典を燒き、信徒の大殺戮を行つて酸鼻を極むる暴行の限りを盡してゐるのである。彼等の宗敎迫害者に對する執拗假藉なき復讐は回敎徒の特質であるにもかかはらず、彼等は屈服を餘儀なくされてゐるのである

支那西北一千萬の回敎徒は、偉大なる日本の來援をどんなに待ちあぐんでゐることであらう

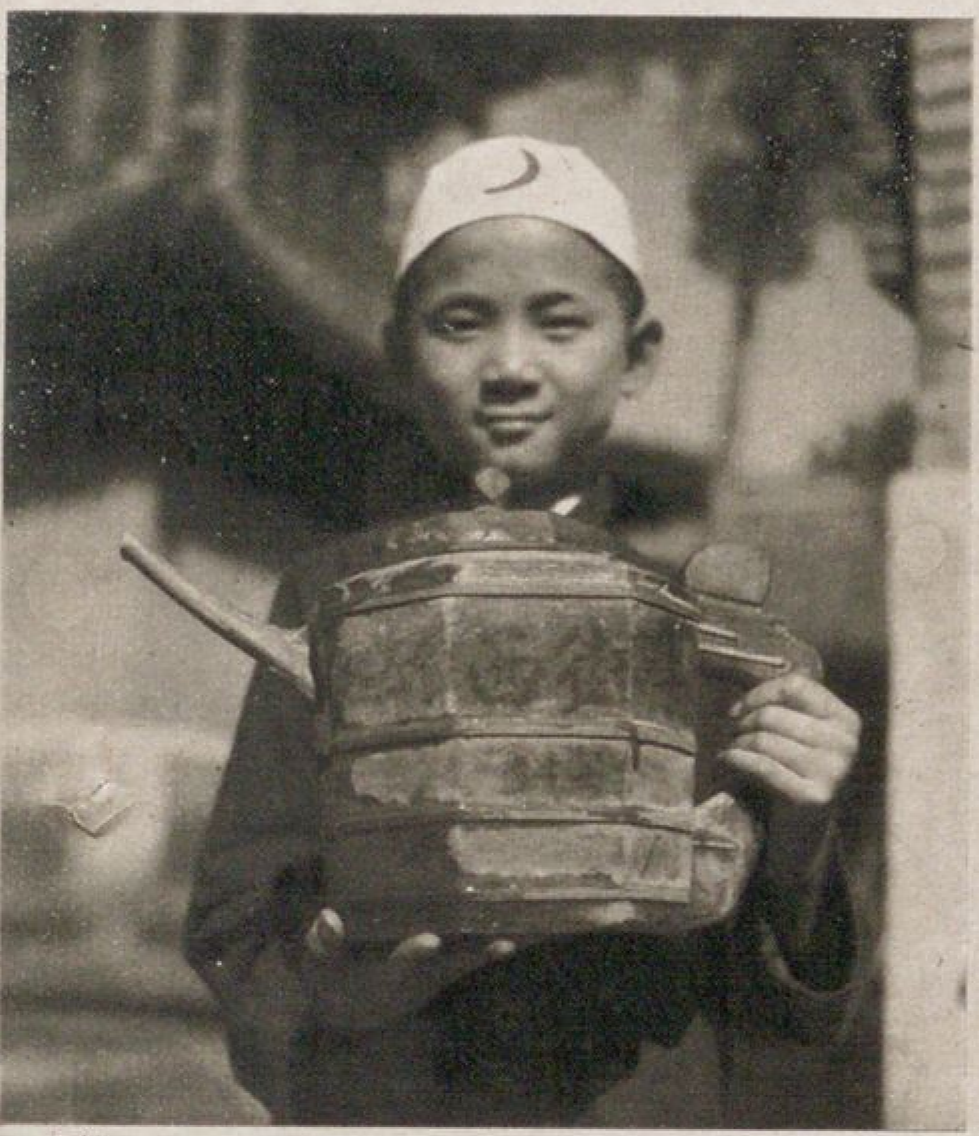


回教徒の

沐浴



一



二



三

一つの民族を把握するには、少數の爲政者の力だけでは不可能である。國民の一人一人が外交官であり、尖兵であらねばならない

我々個人の彼等に對する態度や行動こそ回教徒の行動を決定する重要なる鍵となるのである

北支の回教徒を知ることは、とりも直さず西北の回教徒を知ることになり、そして其のことはやがて、世界の回教徒を知るよすがともなるのである。さうして更にそのことが世界の回教徒の日本及び日本人に對する感情や態度の決定に重大なる影響を及ぼさないと誰が斷言できるであらうか





沐浴は祈禱の前に身心を清めるため
に行ふ重要なる一つの行である
沐浴に大浄と小浄とあり、前者は頭
の頂から耳、鼻、爪先まで文字通り
全身を浄めるのであり、後者は顏、
頭、手足等を洗ふことである
沐浴には細心の注意を拂ひ、使ひ水
も厳密に吟味するのである

一、沐浴を終へて、お寺の庭の
日時計に手拭を干す子供
二、沐浴に使ふ水を運ぶ
三、沐浴を終へて靜かに禮拜の
時間を待つ
四、沐浴室
五、井戸から水を……

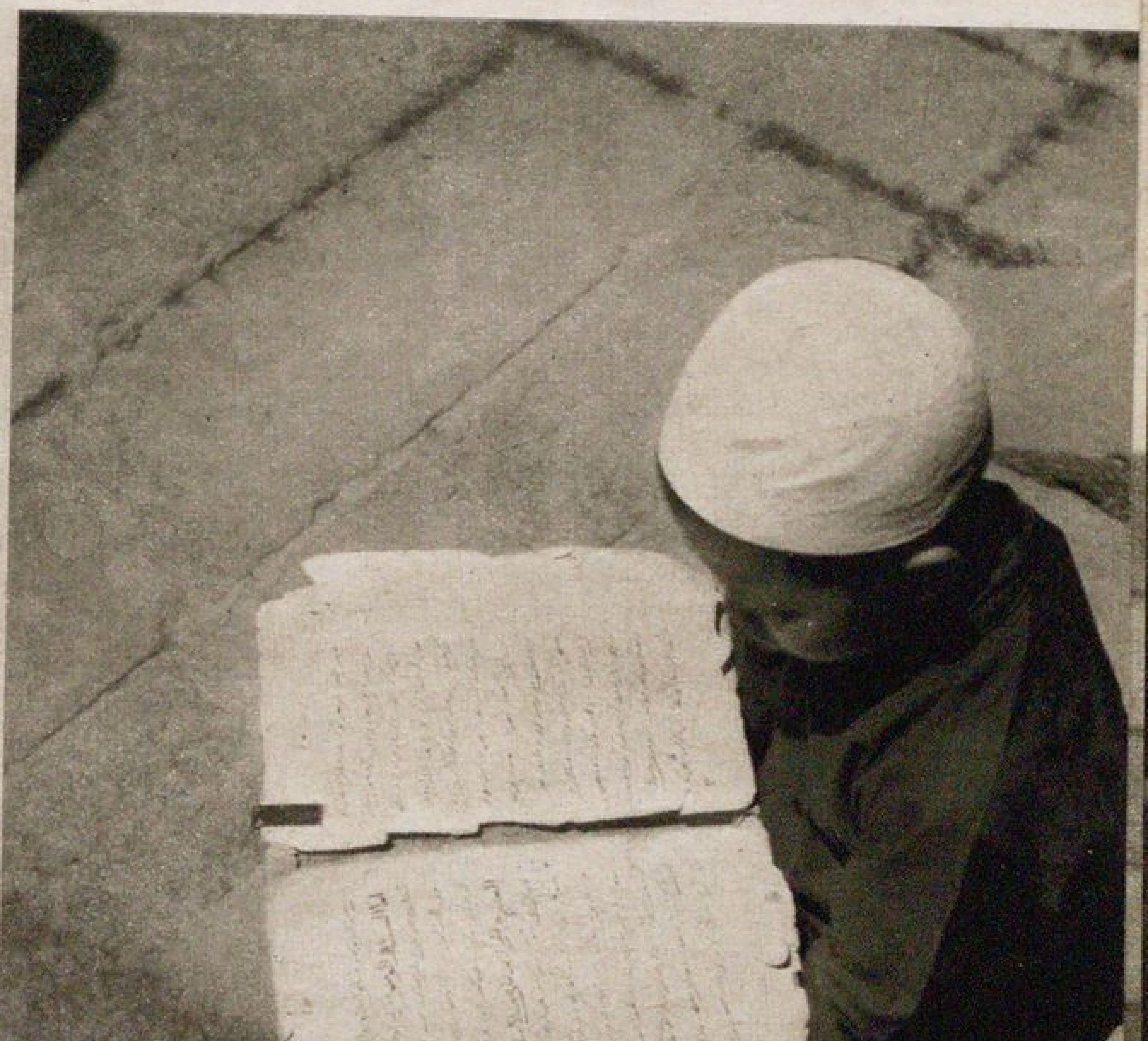



北京清眞寺にて

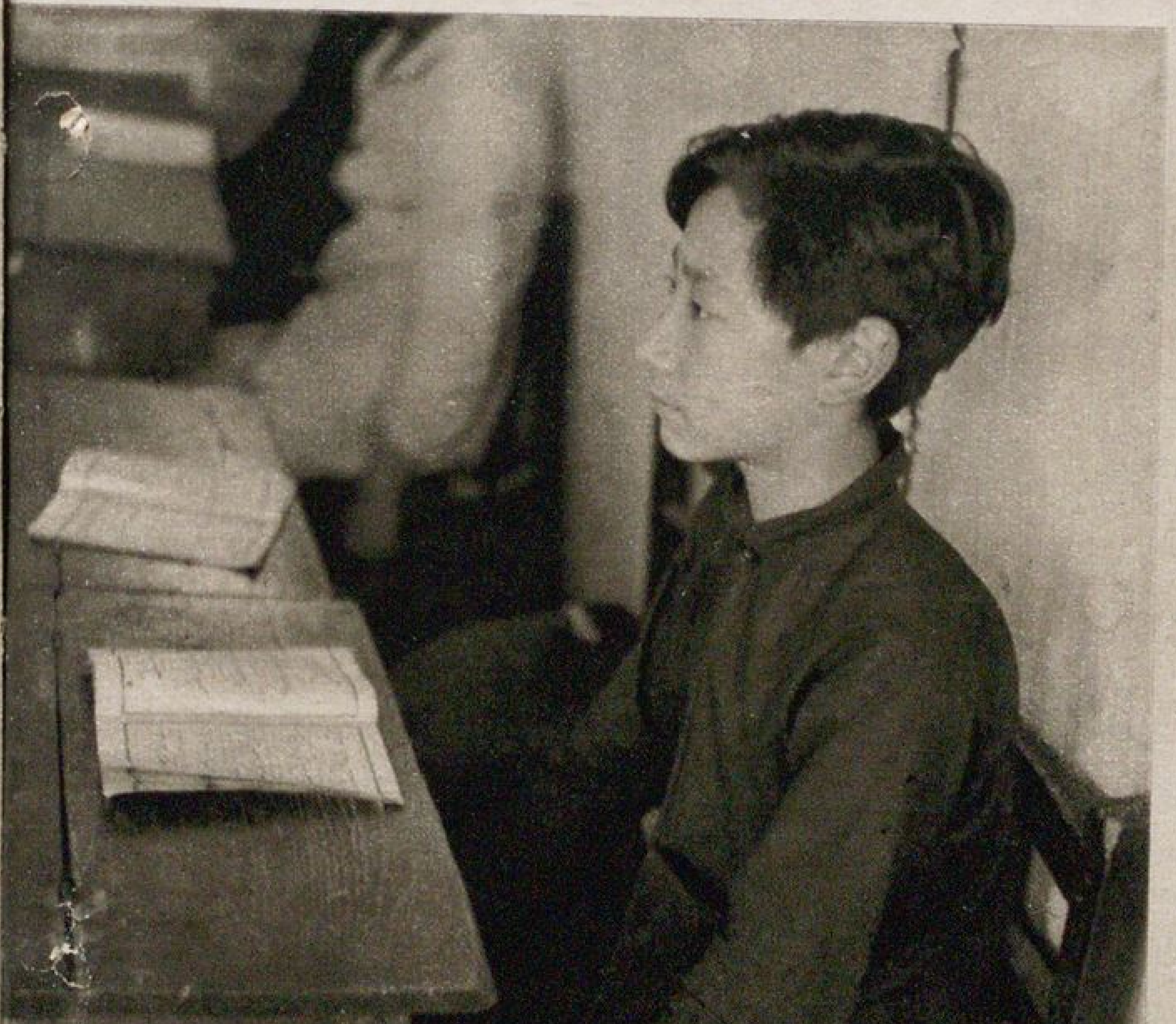
北京清眞女寺の阿衡(アホン)（教長）



一



二



三

北支回教徒の教育

小林元氏著「回回」の中に
「たまたま、蒙疆の或る回民小學校を訪れたわたくしは、なつかしい歌聲に耳を傾ける

みよとうかいの　そらあけて
きよくじつたかく　かがやけば
てんちのせいき　はつらつと
きばうはをどる　おほやしま……

これはわれわれに親しい愛國行進曲の一齣ではないか。……」

といふ一節がある

もちろん新らしい時潮の息吹は邊境の回民の子弟だけを避けて通り過ぎるものではない

北支に於ける殆んど全回教學校の授業科目の中に日語の時間を週二回以上取つてゐないものは無くなつた。その中でも北京西北學院の如きはアラビヤ語を廢止して、日本語を三時間も取り入れるやうになつたことは注目すべき現象である

彼等の日本語への接近はさまざまな意味を持つてゐるではないか

我々は幼き回教徒に眞實の日本を知らしめねばならない

一、回教小學校のコーランの授業
二、コーランの勉强
三、回教徒の小學生
四、北京牛街中國回教總聯合會附設實踐女子中學校生徒
五、バレーの遊戯

五



四

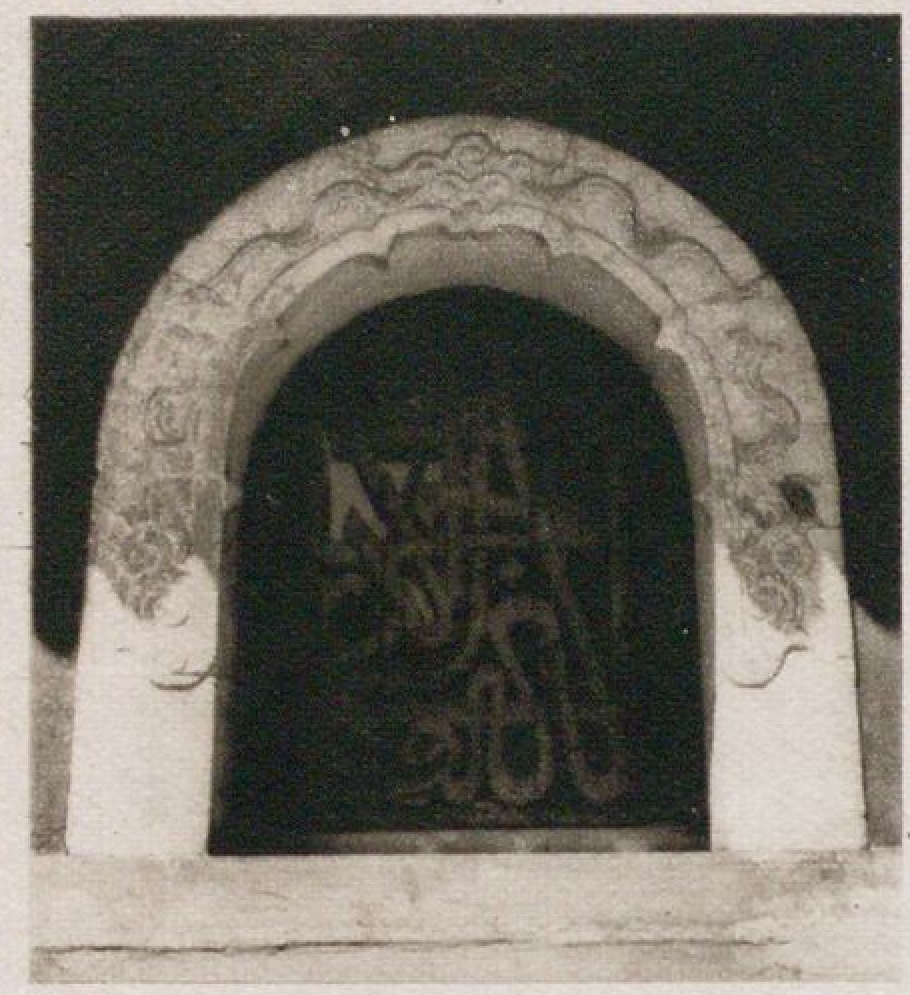


回教寺院



教徒と禮拜寺とは宗教生活上密接不可分の關係にあつて、回教徒のあるところ必ず禮拜寺がある。寺は多くの場合教徒の喜捨によつて建立される。だから、その建築の規模の如何によつて教徒の聚落狀態、經濟狀態などを知ることができる

禮拜寺は、支那では普通に清眞寺と



二

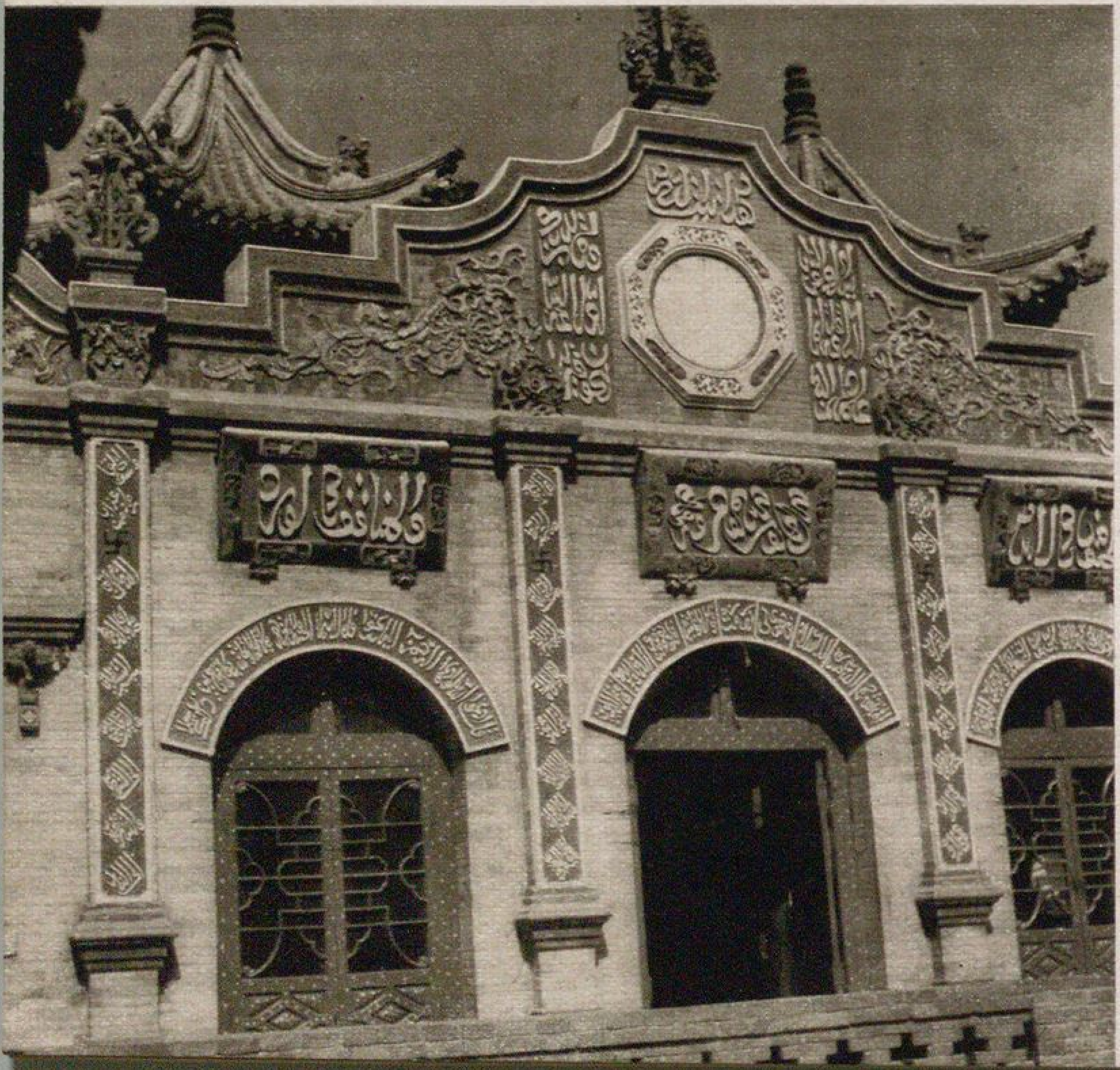


三

一、厚和清眞寺の光塔
二、北京牛街禮拜寺の壁龕
三、北京天橋清眞寺禮拜殿
四、張家口清眞寺の門
五、厚和清眞寺

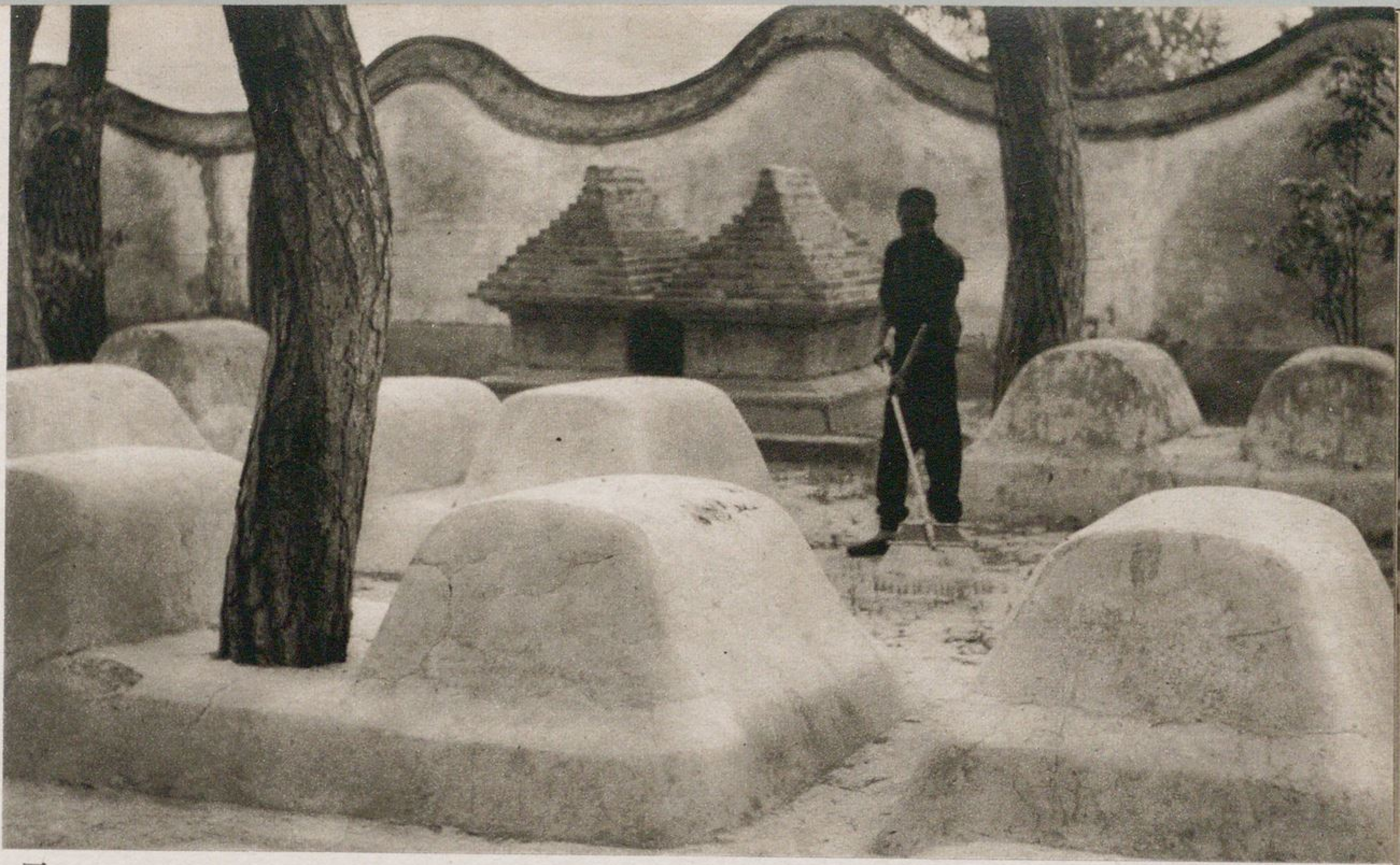


四



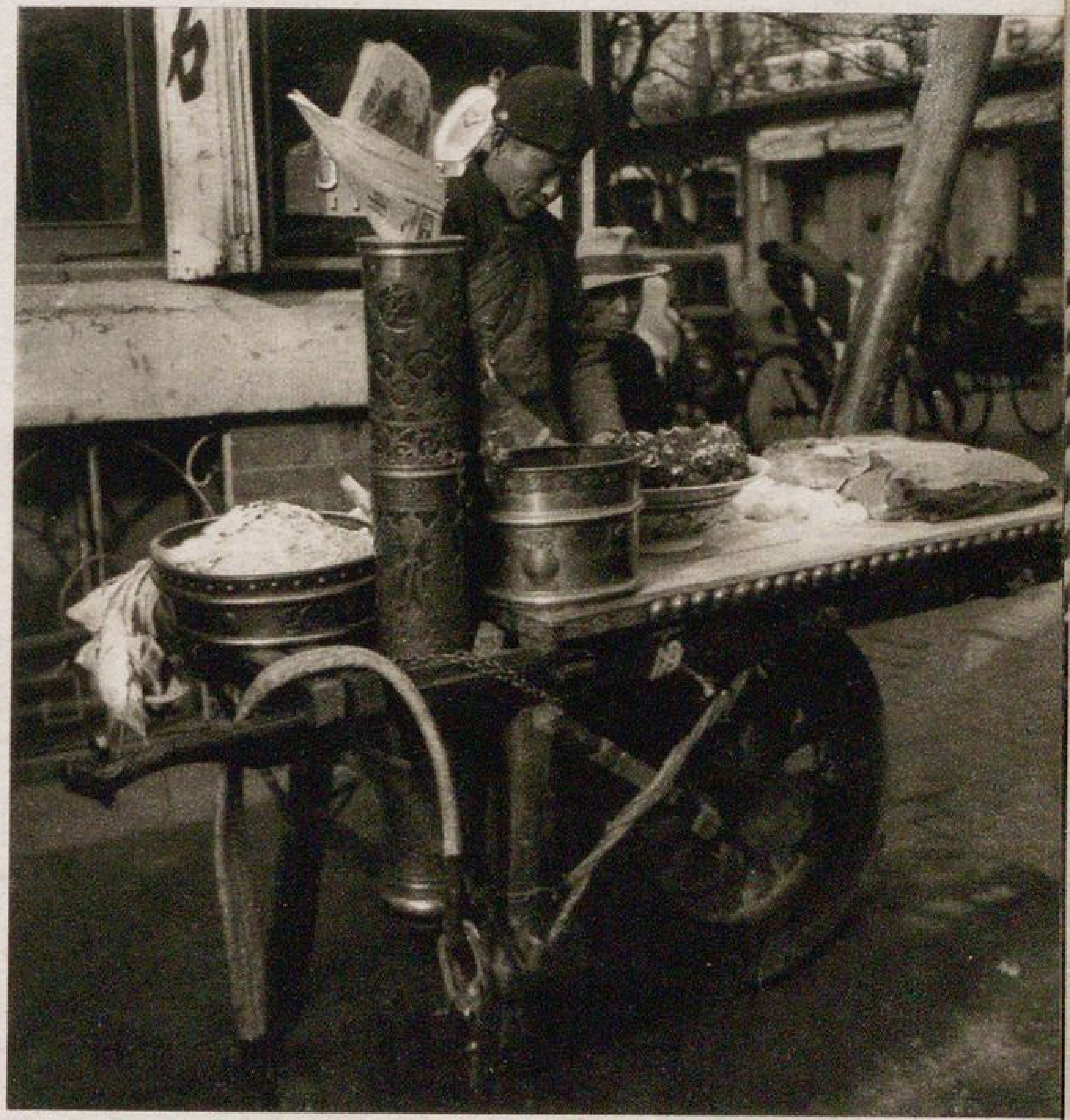
呼ぶが、これは回教徒たちが滿支蒙の住民の中でもつとも清潔であると云ふ意。禮拜堂（大殿）を中心に沐浴室、教長室、海里凡室、事務室、觀月樓、其他附屬學校等の設備があつたりする

北支から滿蒙に多く見られる回教寺院の建築は、完全に漢化せるものと、中央亞細亞樣式を折衷せるものと、色とりどりであつて、多分に過渡期的な感じがある



一

二



三



一、回教徒の墓地

二、回教徒獨特の屋臺店、美しい眞鍮製の容器をヒカヒカ研いて、點心（菓子類）を賣つてゐるが、實に清潔な感じである

三、回教徒の店の看板

四、回教徒の部落、河南省大梓莊

五、經文を配せる置時計



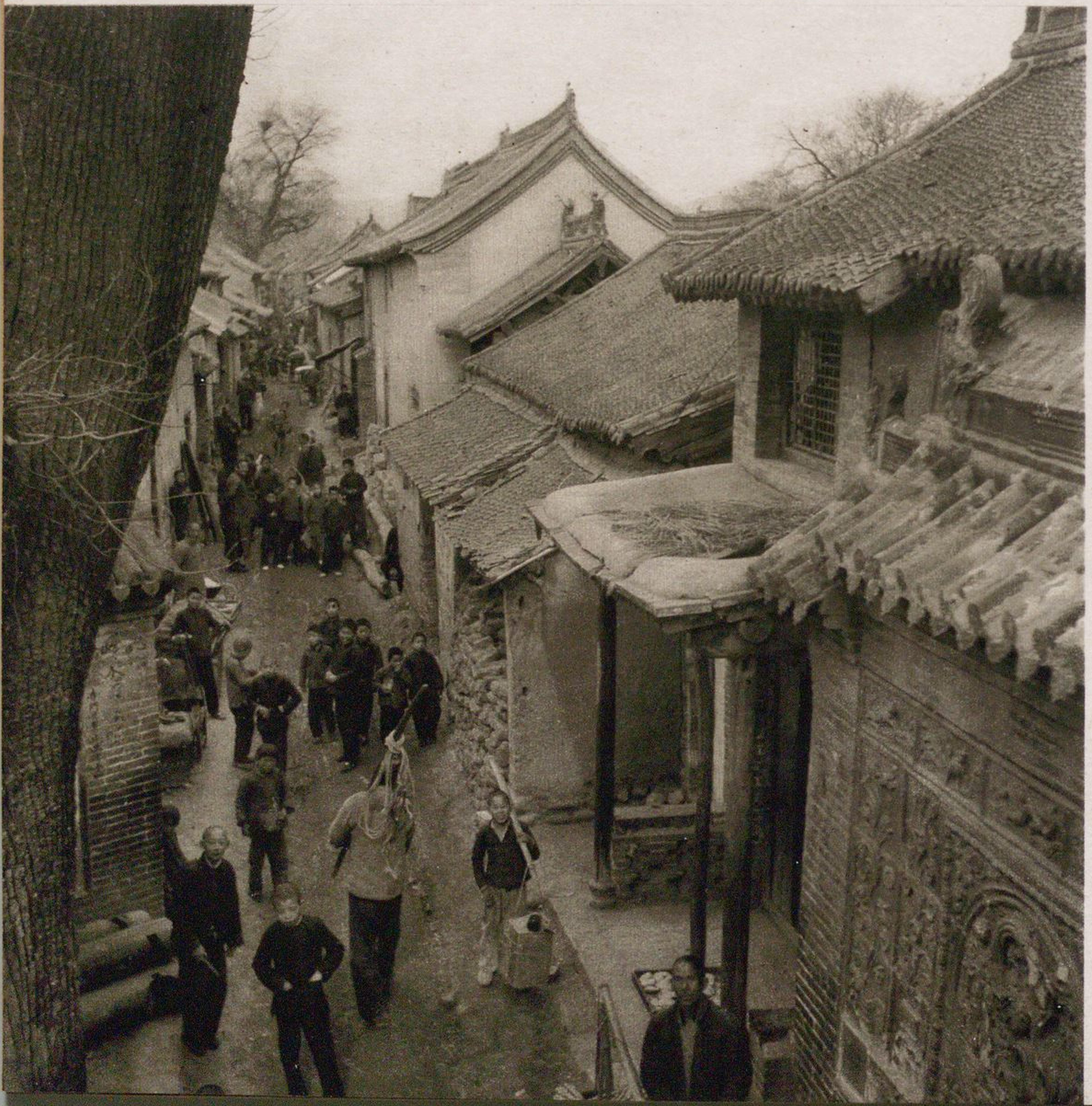
北支回教徒の生活

支那の回教徒は寺院を中心にして集團生活を營んでゐる。北京宣武門外の牛街區は北支でも回教徒の最稠密區であり、約三、〇〇〇戸を數へる

北支に於ける回教徒は大體に於てあまり裕福な生活を營んでゐない。それは清朝以來の回教徒壓迫政策にもよるものであらうが、それよりも回教徒自身「我等は漢民族に非ず」と稱して、西域人の子孫の誇りを持ち、一種の宗教的な排他的な集團を形造り、さうしてアラーによつて定められた民として、その職場も自ら制約してしまつたために、大きく延びてゆかなかつたことによるものではなからうか

いま、彼等の職業を分類すれば、屠殺業、牛羊肉店、皮革業、旅館、飲食店菓子屋、浴場、藥種業、雜貨店、船頭車夫、馬夫、兵士、其他となつて居り從つて商賣が多いのであるが、それも行商人か露天商が大部分である

彼等の多數にはいまだ「安居樂業」の境地が到來してゐるとは云ひ難い

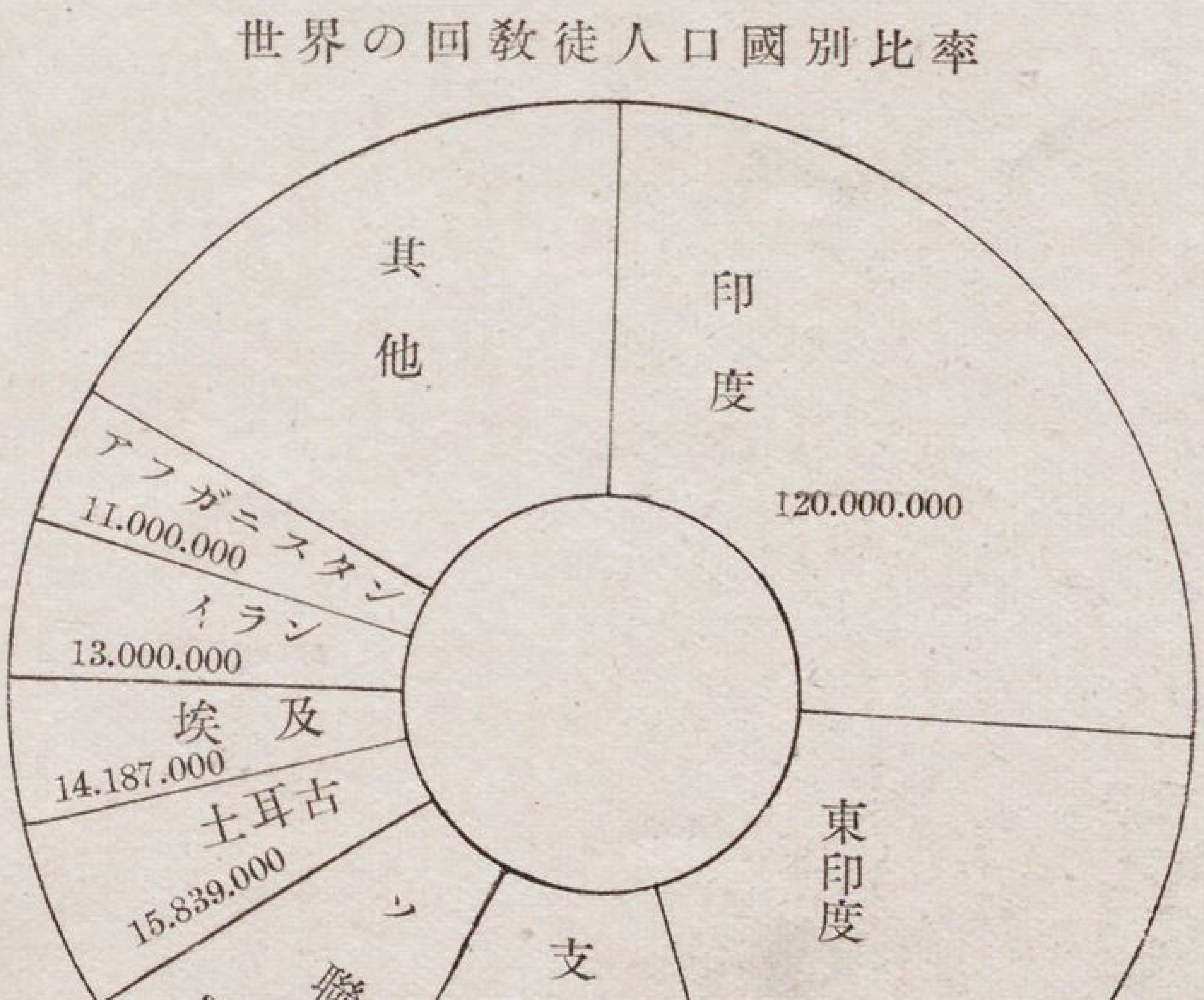


世界の回教徒

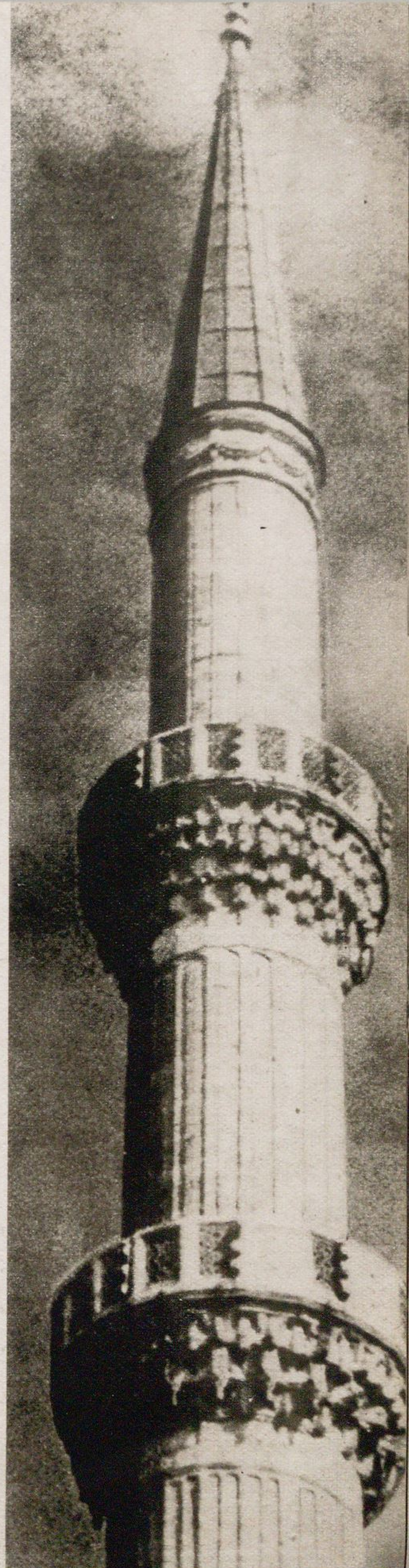


二

世界の回教徒人口國別比率



總計3億強



一

西亞諸國略圖



一、尖塔又は光塔（ミナレ、ミナレツト）禮拜の時間が來ると此の塔からムエツズインといふ一種の役僧が上つて、附近の教徒に呼びかける。支那では此の塔を觀月樓といふ

二、禮拜、回教徒は禮拜の時間がくると何處の土地にあつても聖地メッカ（アラビヤ）の方向に向つて祈るのである

三、日常の此の禮拜は、國家、民族危急の際には直ちに、國家、民族の祈願となる



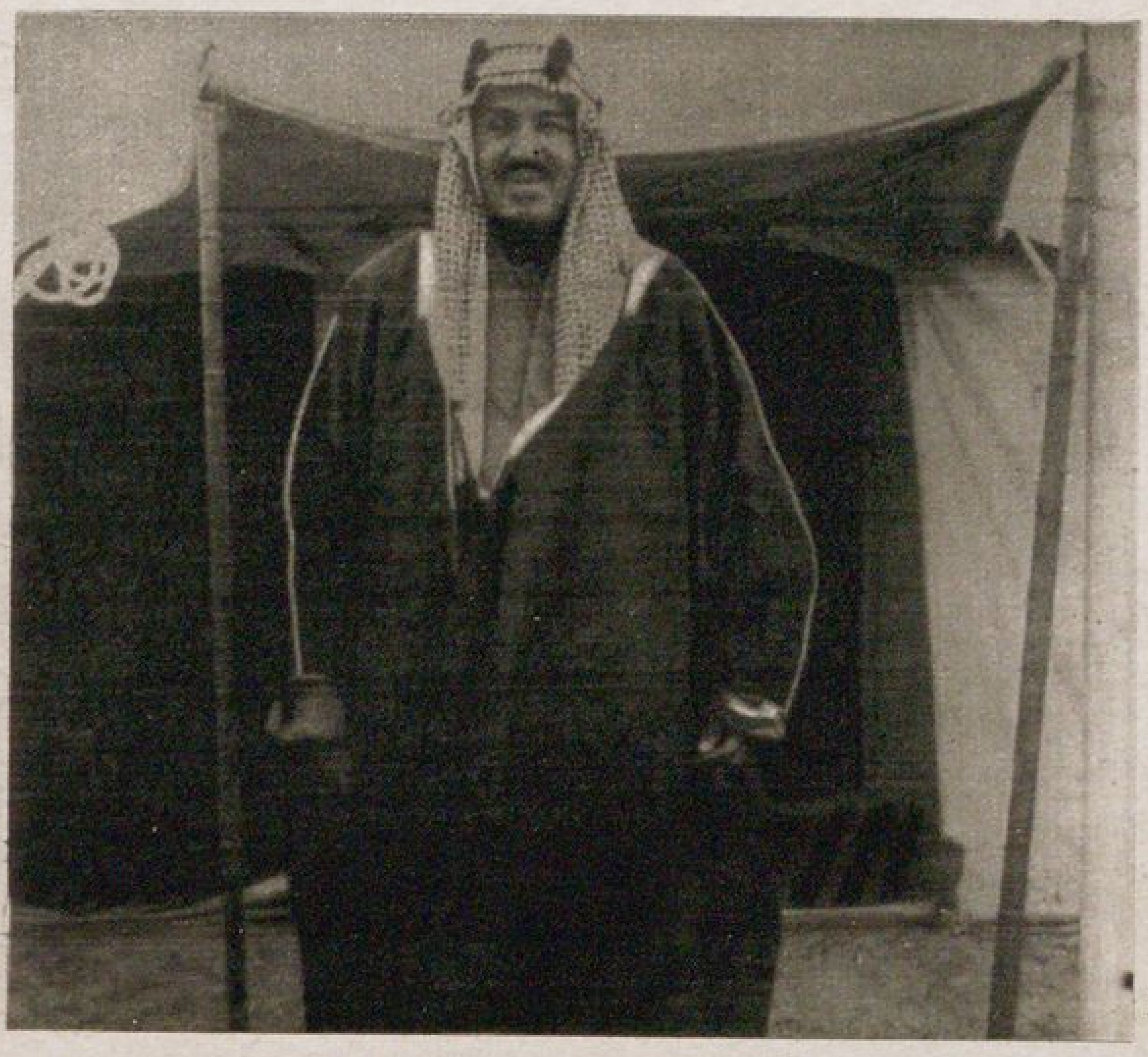
メツカを中心に世界に分布し、三億を超ゆる回教徒は、その大部分が西歐人特に英國の支配下に多く居住し、今なほ邪教として、白人のつくつた舊體制の下に、多くは不幸なる生活をつづけてゐるのである

これらの教徒が、滿洲、支那、西方アジア、アフリカ、南洋の新領土から印度、埃及に至る我が東洋の民族であることに思ひ及ぼすならば、遠いアラビヤ夜話の昔は知らず、現實に於て我々は無關心では居られないのである

甦へる回教徒



一



三



一



三億餘の回教徒のうち、完全に獨立國家を形成してゐるのは二、三千萬人に過ぎない。他の大部分は、西歐諸國の支配下にあるのである

彼等の白人に對する抗爭意識は極めて强烈であり、これまでもしばしば叛亂を起したのであるが、如何に彼等が精悍でも、支配國の巧妙なる彈壓政策と近代兵器には敵はないので、隱忍、時機の到るを待たざるを得なかつたのである。然し今回の大東亞戰爭によつて、彼等幾百年來の希望が達せらるるの日が遠くないことを思はせる

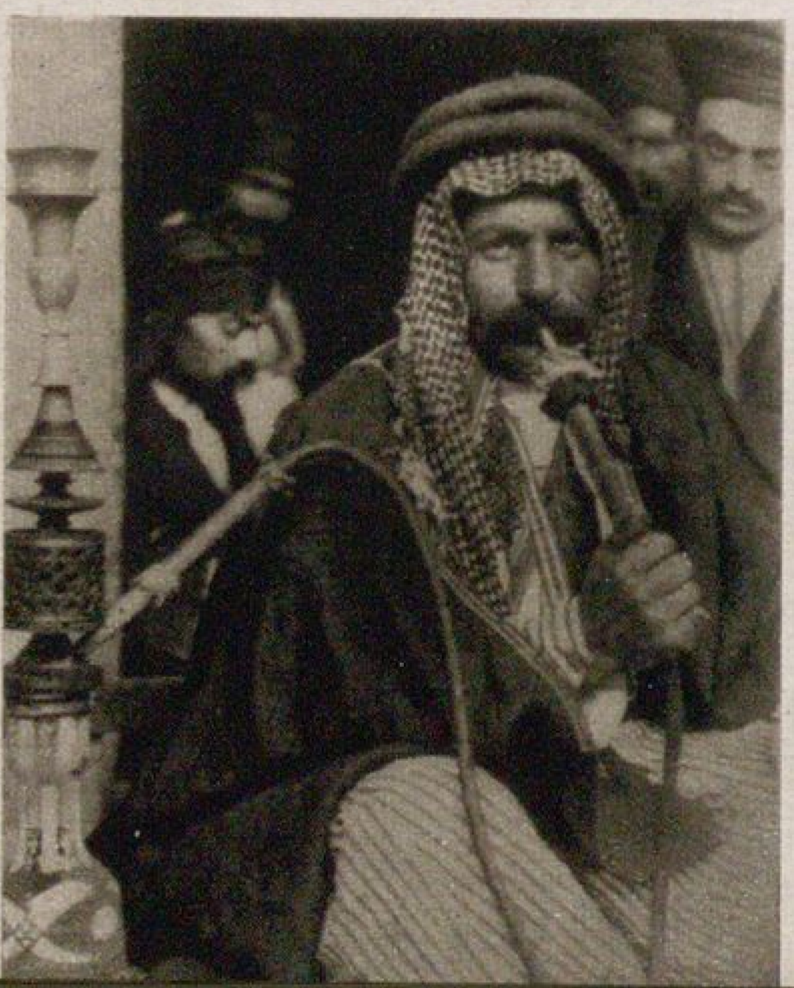
一、駱駝に跨れるアラビヤの戰士、此の精悍なる戰士に近代兵器を與へるなら白人兵などものの數ではないのである

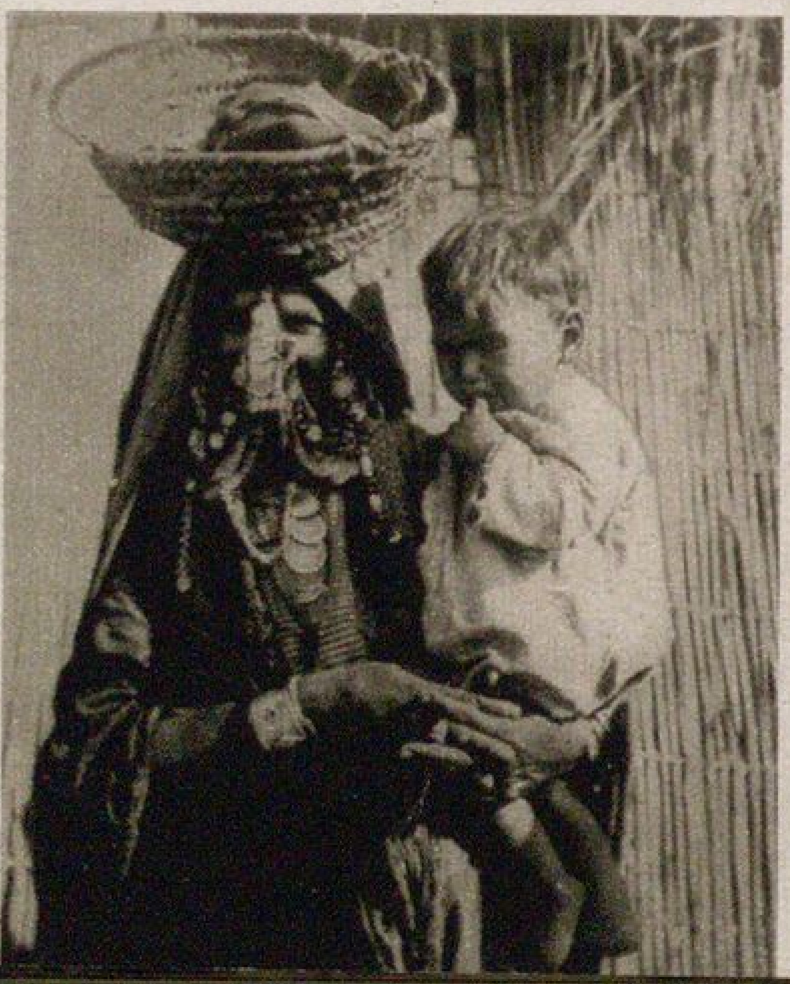
二、前大戰直後、ケマルの蹶起に際し、戰勝を祈願せる回教徒の示威行列

三、イブン・サウド王、アラビヤを睥睨する回教世界の巨星

四、五、アラビヤ砂漠の住民（特に遊牧民）は都市の住民と區別してベヅインと呼ばれる。寫眞はその代表的な服裝である。口に咬へてゐるのは今尙ほ用ひられてゐる水烟草

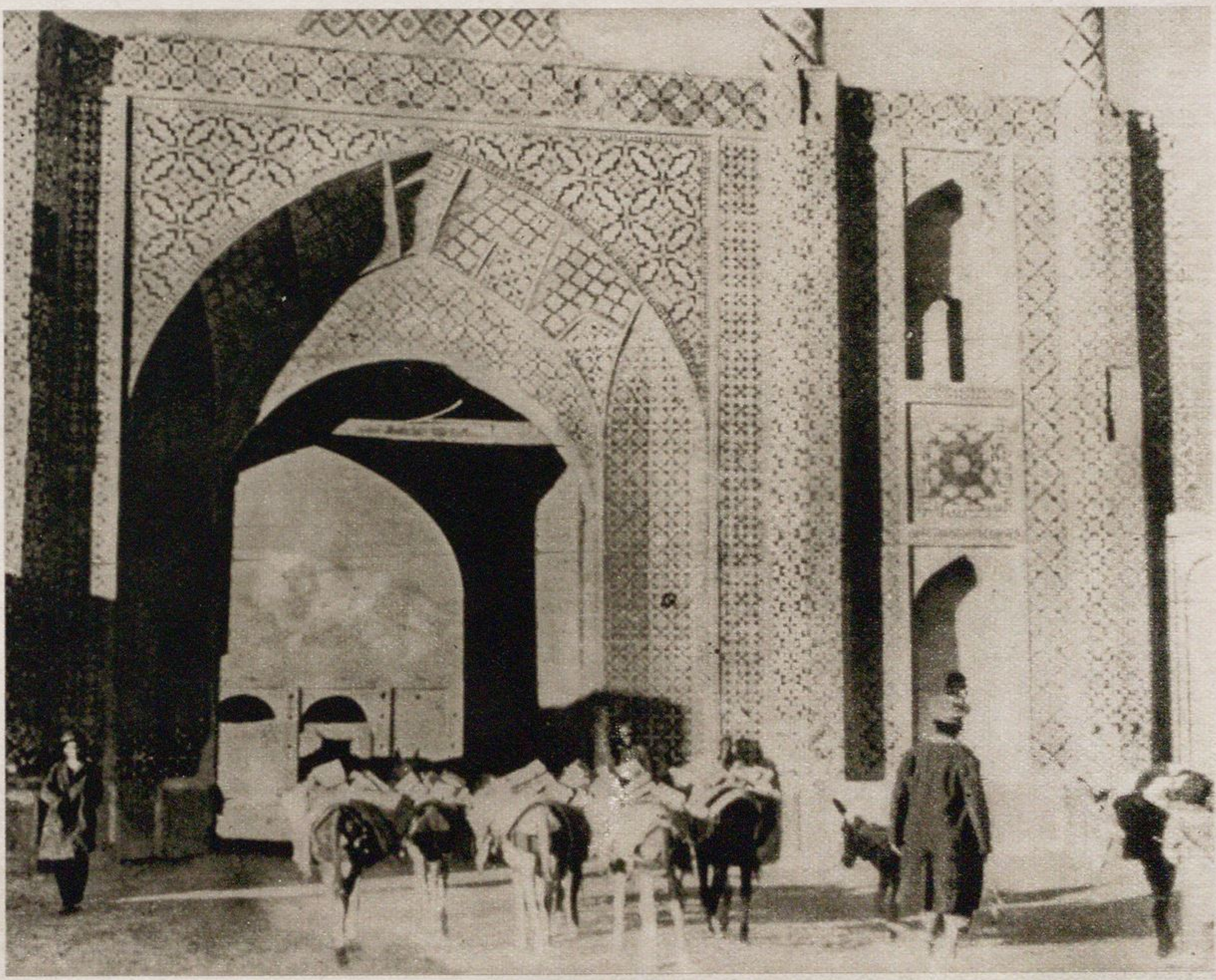
六、鷹と遊ぶ蘇聯領ウズベクの子供









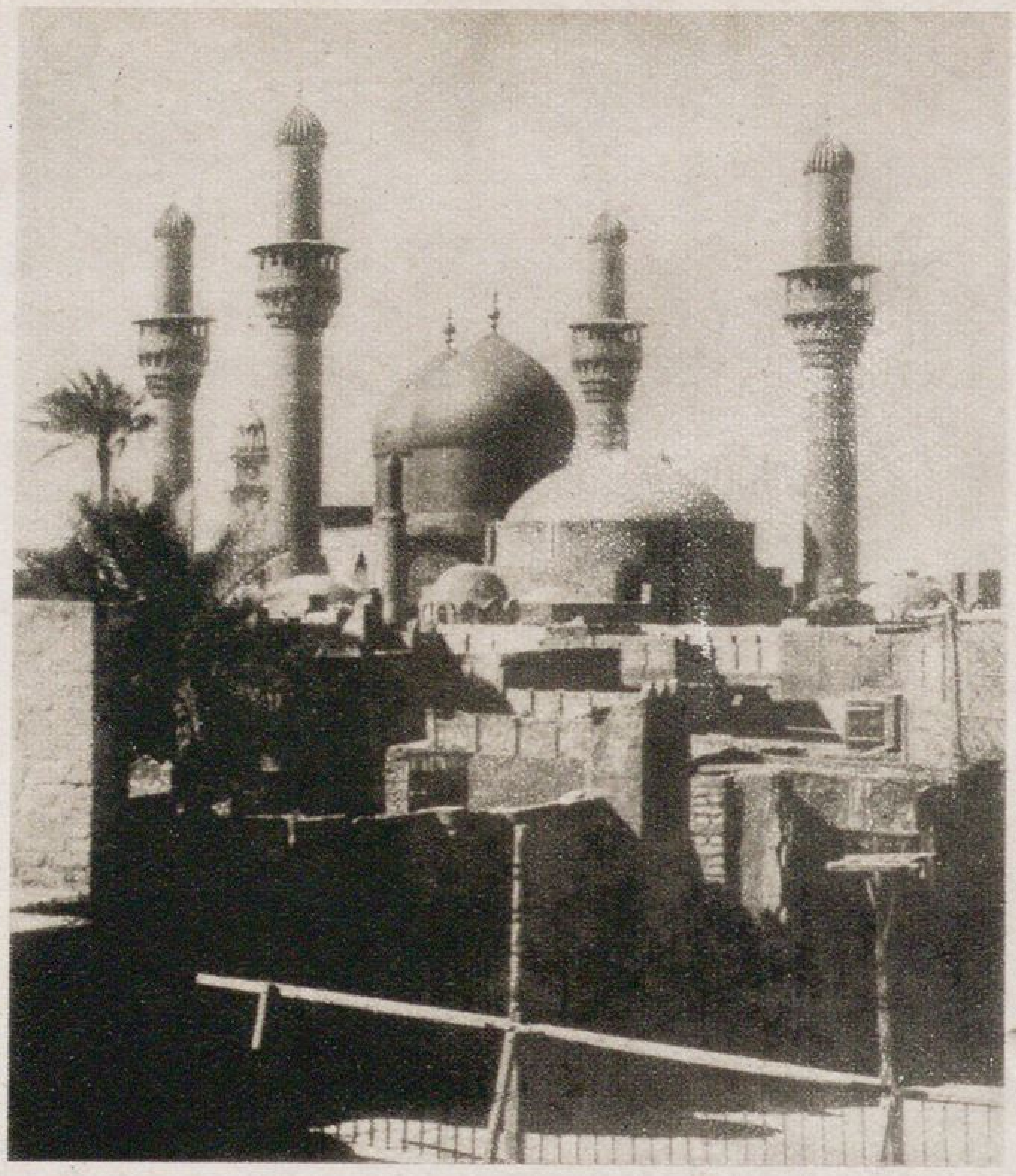


一、イスタンブール、サン・ソフィヤ寺院

二、イランの首都テヘランの城門、曾ては十二を數へたが今は僅か四門。イラン人の藝術的國民性は回教にも一つの神秘的要素を加へた。時々回教徒と思へない程の異色が現れてゐる。例へば絨緞や密畫などでも、イランのものは嚴格な回教主義を離れて花鳥獸類なども描き、時には人物なども題材にしてゐる（回教では偶像や象徴を排斥する結果その作品は幾何學的の圖案に限られてゐる）。サラセン文化も多分にイラン文明から受入れたのである

三、バグダッドに於けるシーヤ派の寺院

四、スルタン・アーマド一世寺の丸屋根の内壁（トルコ）



三



四

回教の文化

第十世紀から第十一世紀にかけての西洋は所謂暗黒時代であつて、一部の僧侶のみが僅かに學問の傳統を維持してゐた程度であつた。殘りは貴族も平民も皆、無學であつたのである。一方回教圏アラビヤに於ては實に絢爛たる文明を持つてゐた

今日尚ほ、歐洲に於ける科學用語、特に航海術、數學等が夥しくアラビヤ語源であることをみれば、如何に彼等が卓越せる文化を持つてゐたかが了解できるであらう。アラビヤはギリシヤ、ローマの文化を保存し、之を改良し、更に印度、支那の文明を融合して光彩陸離たる文化を確立したのである

十字軍遠征の如きは、見樣によつては西歐の野蠻人が東洋の文明國へ知識の吸收に行つたとも云ひ得るのである

放牧



シリンゴル盟バルトノールの大砂丘に遊ぶ蒙古馬





一、黄河の減水
二、黄河河畔の造舟場
三、清い湧水のある龍泉寺
四、龍王庙山上より城内展望

京包線の終點で北京を去る西北八一七粁、現在汽車で北京から約一晝夜

漢民族がこの地に來住したのは清の乾隆年間のことで、爾來西北の開發と移屯奬勵によつて漢人の移住する者日增しに多くなり、京綏線（京包線）が此の地まで延長されるに及び、急激な發展をした

北は大青山に據り、南に洋々たる黄河の流れを控へ、市街は丘の腰部から河邊の平地にかけて築かれてゐる

土地は砂漠質で城外の處々に曹達が霜のやうに吹き出し雜草が粗生してゐるあたり塞外邊疆の空氣を感ずる

古來「萬里の黄河、單に寧夏、包頭を利するのみ」など言はれた如く、黄河の水運の便は新疆、甘肅、寧夏、青海省並に五原、臨河等の河套地方と結びこれ等諸地方の物産は包頭を中繼として京包線により京津地方に運ばれ嘗てはその貿易額も張家口を凌いで蒙疆地域最大の商業都市であつたが外蒙の獨立、更に支那事變により西北との交通貿易も杜絶し、今は昔日の面影もないが新秩序建設の曉にはやがて又その地勢を利して再び活潑な市況を呈するに至るであらう

現在のところ包頭の重要性は經濟の中心地としてよりも防共陣營の前線據點としての使命にある



包頭



三

四





一

二



包頭周邊

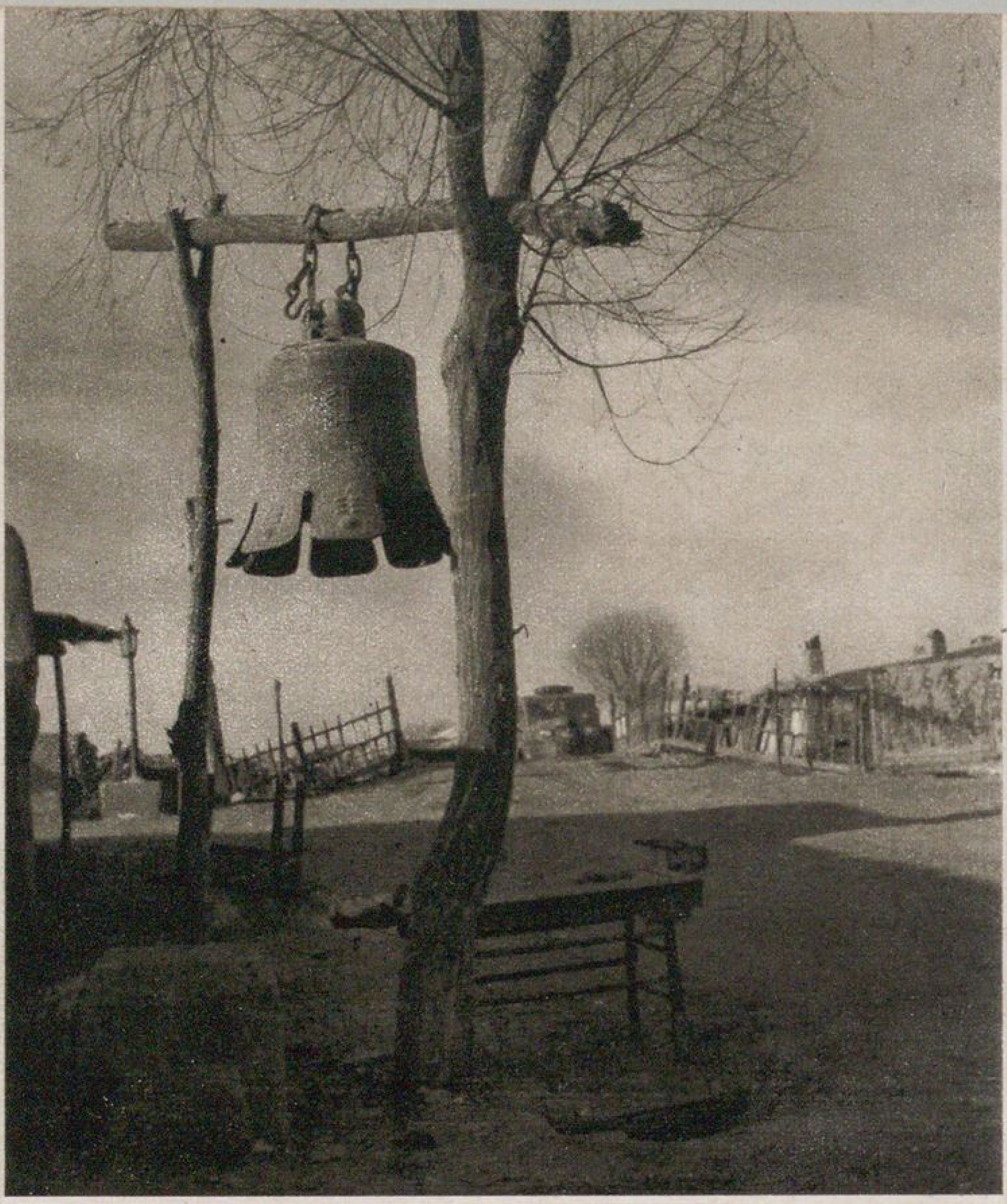
＊この地は昔から交通貿易の要衝であり
現在では軍事上の要點である
廣大なる五原地方は、土地肥沃、農牧
盛で、支那西北の穀倉と稱される

一、陰山を越え
二、五原市街
三、敵將傅作義の殘した防空警報の鐘
四、オルドスの砂漠、兎たちの足跡が見られる



白草原、京師を望めば
黃河水流れて盡くる時無し。
秋天曠野、行人絕ゆ
馬首東來するは知る是れ誰ぞ。
（王昌齡）

此のあたりまで來て、荒漠たる蒙古の草原と滔々たる黃河を望んでは、誰でもうたた望鄉の念禁じ難きものがあるであらう



三



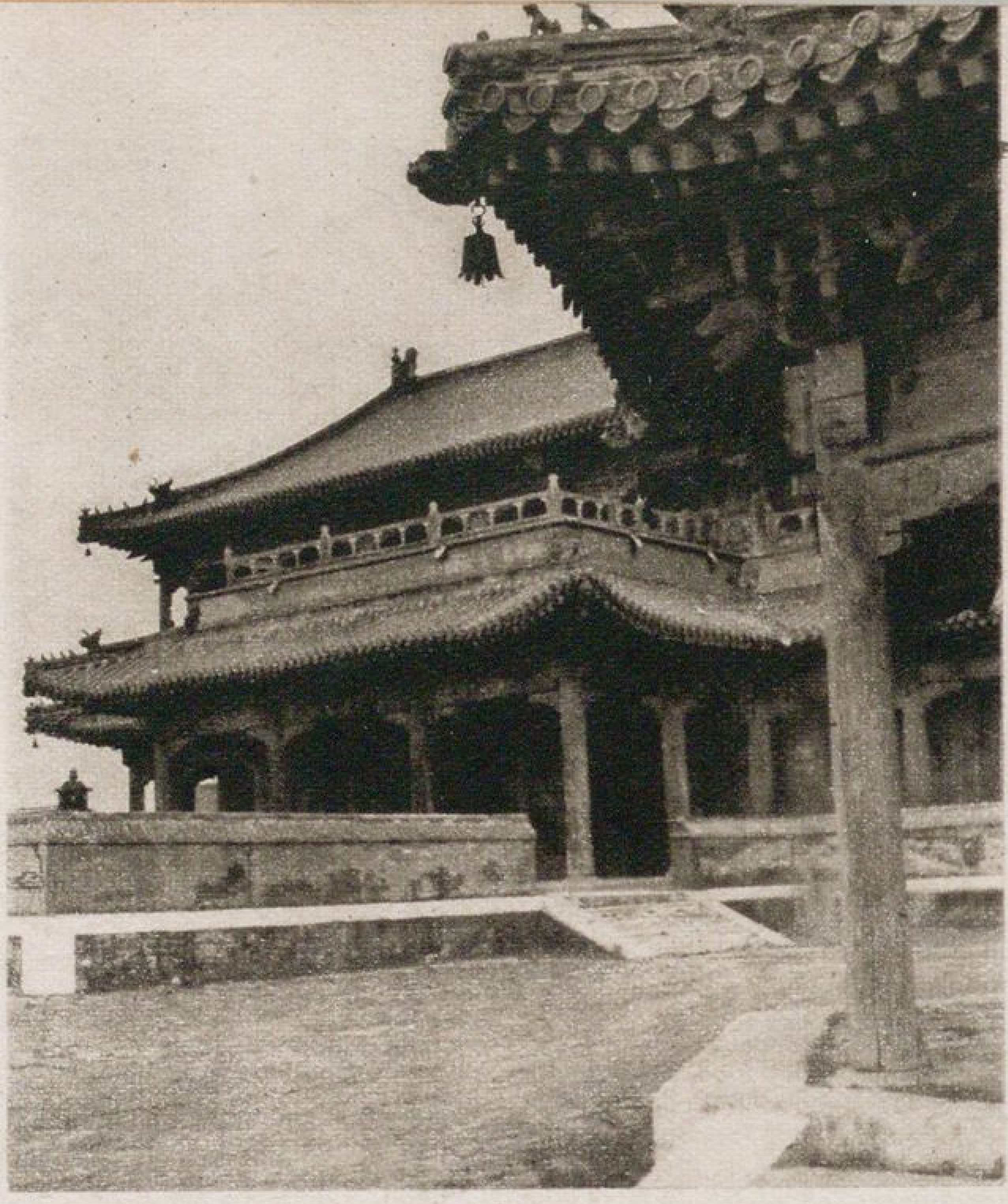
四



多倫（どろん）の廟會

多籠りの永い蒙古人にとつて、廟の夏祭は一年中で一番樂しいときである。果てしない大草原には百花繚亂と咲き亂れ、男も女も大人も子供も嬉々として野に出て、一箇年分の自然を心ゆくばかり味はふのである

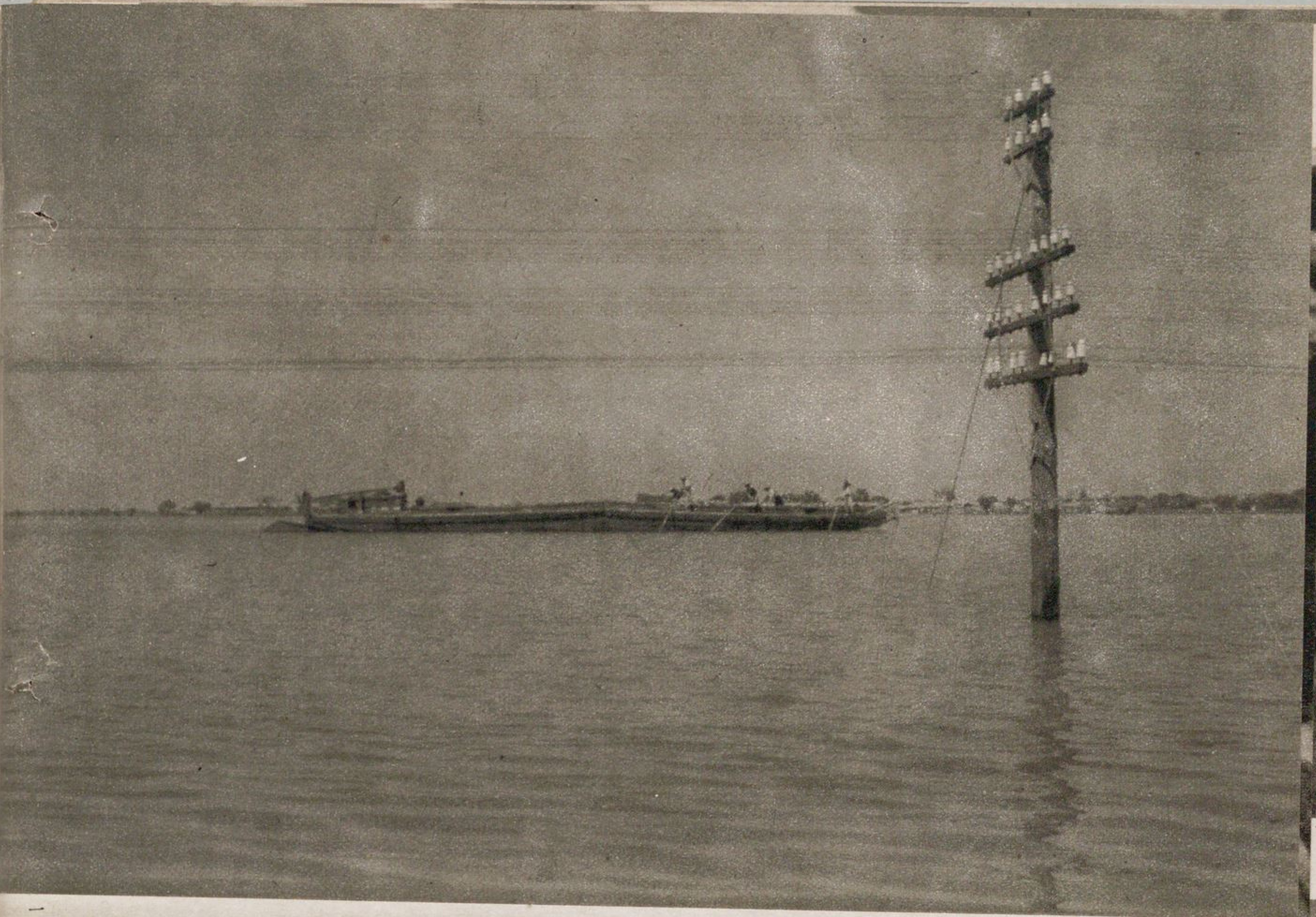
廟は東西二つあつて、十數人のラマ僧が鬼面や獸面を冠り、手足を振り廻し鉦や大ラッパの調子に合せて踊るのである。觀衆はその周りに二重三重に大きな圓を描いて見物するのである





右は、降魔の踊りのときのラッパ（アュレー）
左上、東廟本殿　左下、降魔の踊り

一

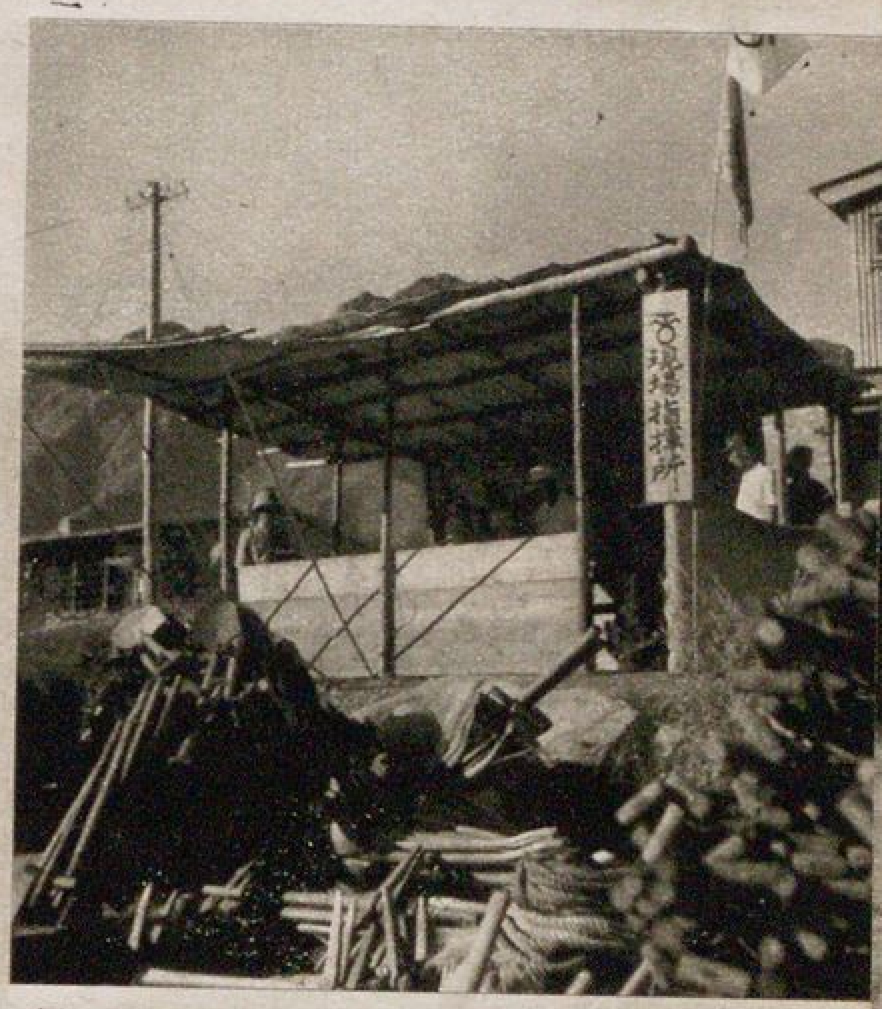


洪水と治水

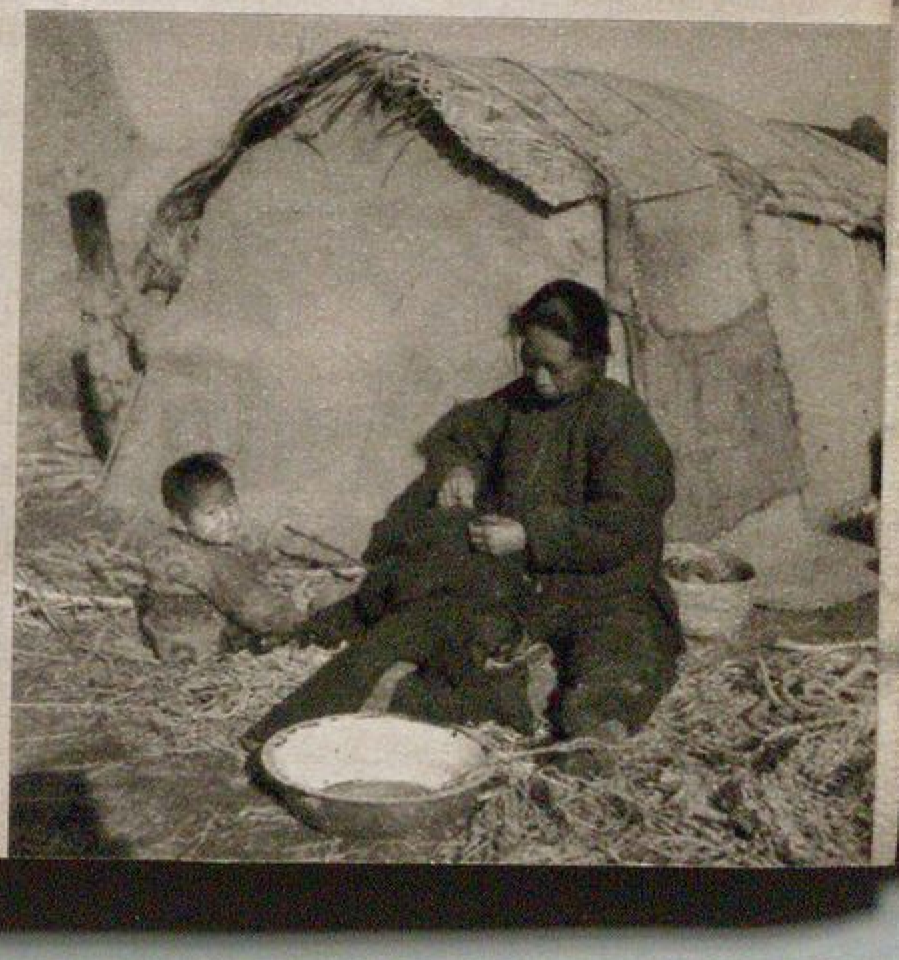
北支那に於ける大抵の河川は天津に通じ、白河となつて渤海に注いでゐる。天津より北支平野に五指狀をなして擴つてゐる北運河（上流潮白河）、永定河、大淸河、子牙河（上流滹沱河及び滏陽河）及び南運（上流衞河）の各支流は燕山、五臺及び大行山脈奥深く毛細管のやうに喰入つてゐる。この河川の分布こそ、間接的ではあるが、天津

一、河北平野の出水狀況
二、華北交通の水害復舊指揮所
三、罹災民の生活
四、鐵道復舊工事
五、四十五瓩のレールが飴の如く飜弄される
六、復舊狀況

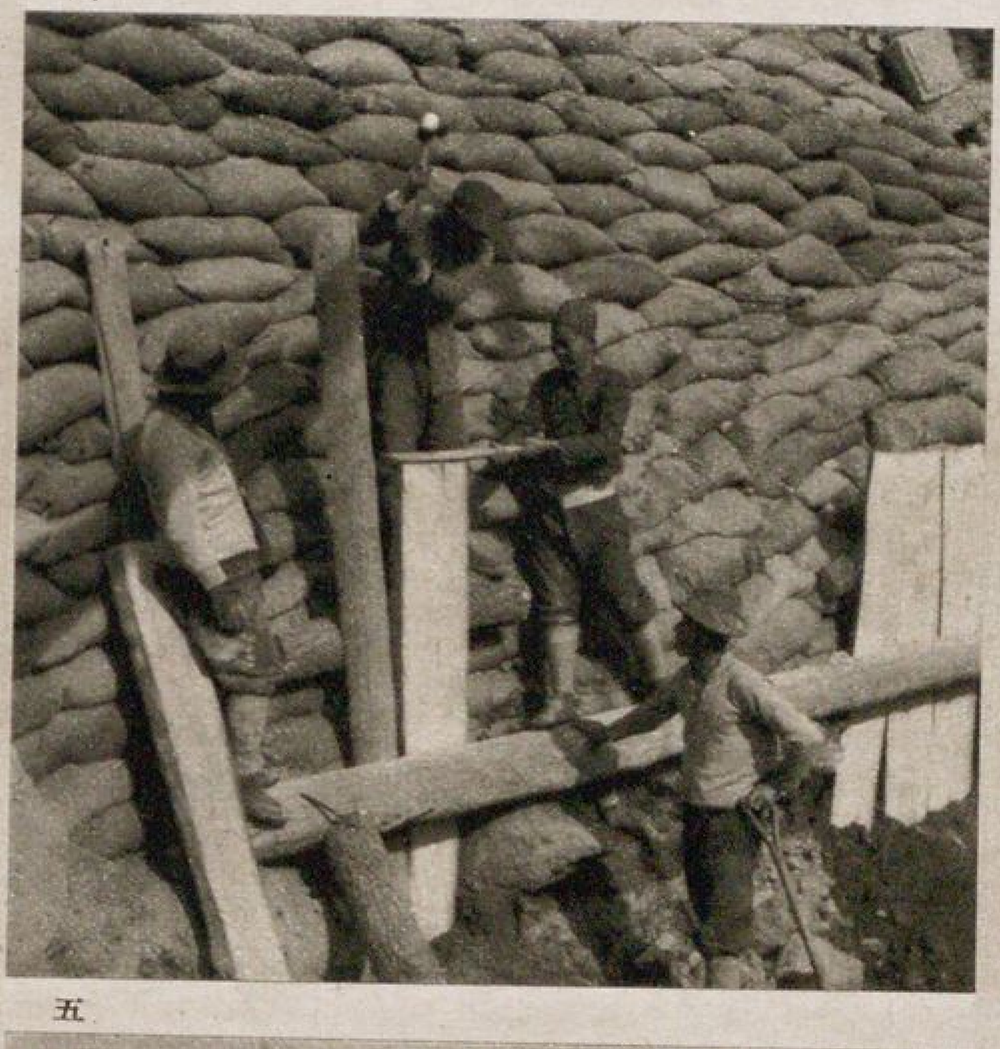
二



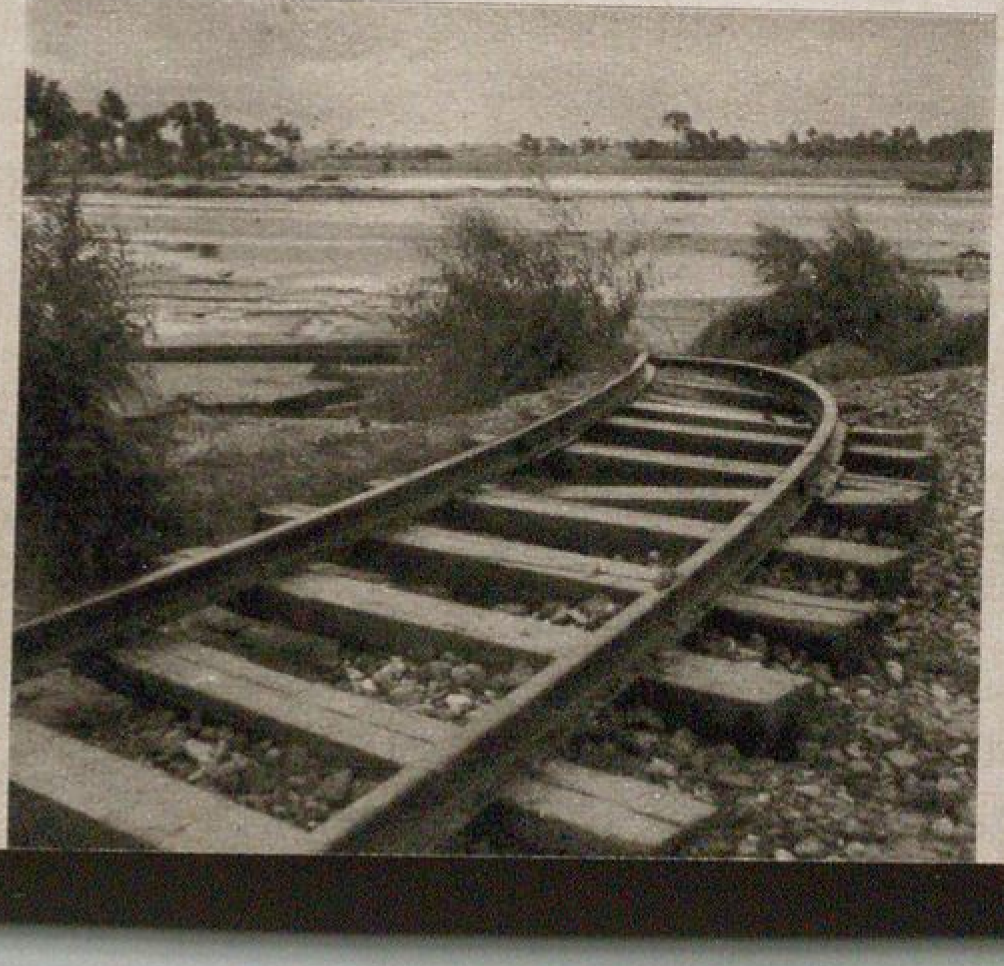
三



四



五



地方の水害の根本原因をなしてゐるのである。これ等山地は雨水を吸收する草木に乏しい爲、雨水は直ちに急勾配の溪谷を流れ、互に合流しつつ山麓線を通過して平野へ奔流する。山麓線に於て勾配が激減される爲、流水は急に緩慢となり、後方より奔流する水を塞ぐと同時に、フォーク狀に合流してゐる支流はその合流點に於て急激に増水し、ここに溢流し氾濫する。一度平野に氾濫した水は平坦なる耕地に果しなく擴がり地平線は遂に水平線となる。比較的高丘に在る村落のみが小島のやうに泥海に浮ぶ

然し、何と云つても洪水の直接的原因は降雨の狀況如何にある。北支那の雨量は季節風帶としては比較的少いが、降雨日は夏季の數日間に間歇的であるが集中される爲、洪水の原因となる。又、年々の雨量も均等でない。黄河志に依れば、六十二年間に於ける北京の年平均雨量は六三五粍、その間、最大年雨量は一〇八四粍、最小年雨量は僅かに一六八粍である。その最大と最小は實に九一六粍の差を有し、最大は最小の約六倍半に相當する。かかる降雨の不均等は時として夏季の數日に豪雨となつて降り注ぐ。それが禿山を崩壞し、洪水となる。天津は廣大な地域に降つた雨水の合流點に在る爲その災害は特に目立つ

昭和十四年の天津大水害は華北交通創立第一年目の苦い試煉として記憶されてゐるが、當年は各河川上流山地に過去の平均雨量の二倍から七倍の雨が降つた。七月に入るや、直ちに北支那一帶に降雨を見、その後同九日より三日間北京西部より石家莊にかけて連日降りしきり、この間の雨量は約二〇〇—三〇〇粍であつた。この雨で各河川は相當の増水を見せた。その減水を待つ間もなく、二十五日より三日間北京西方永定河流域に第三回目の豪雨が來襲し、蘆溝橋近邊を初めとして各所に決潰箇所を生じた。而て、第一回の新鄉附近の雨水は衛河より南運河を、第二回の石家莊附近の雨水は滹沱河を經て子牙河を、第三回の豪雨は永定河をそれぞれ流下して、殆んど同時に天津地方に迫つた。ここに軍官民の死力を盡した防水作業にも拘らず遂に天津は浸水してしまつた。剩へ南方より颱風が來襲し海水が白河に逆流するなど減水を遲延せしめた。平時、内河川を一所に集め北支那の民船の輻湊する所、その利を一身に享けた天津はそれだけ水害は慘を極めた

この時の北支那平野の浸水面積は琵琶湖の約七〇倍に相當し、その水害の如何に大なるものであつたか、これに依つて想像出來よう

それでこそ、食糧を節約する爲、自分の子供を激流に投ずるといふパール・バックの小說「大洪水」も納得出來る滹沱流域の娘は高丘に在る家へ嫁ぐを念願し、耕地を奪はれ、役畜を喰つてしまつた農民は出稼人となり、働くに力なき者は都市に出て食を乞うた。洪水に依る飢餓に迫られ、人を食ふことさへ敢へてしたことは、古い話ではない。農民がその家屋を小高い丘に密集して造り、城壁を堅固にするのも、匪害を防ぐのみでなく、水害を豫め防ぐ爲でもある。中國農民は一度洪水となれば運を天にまかせ、食を節して持久戰に出る消極的態度をとるが、我等現地日本人はかかる消極的態度を排斥する。軍及び建設總署の防水工事に協力して、華北交通社員は自己の職場を死守し、破壞箇所の應急復舊工事に日夜濁流の中に奮鬪するのである。或は小舟を操り、島となつた愛護村部落に食糧を配給し、難民を救ひ、それ等を督勵して諸作業に協力せしめる。又負傷者病人或は水害後の流行病の豫防の爲の施療班の活動など涙ぐましいものがある。（須藤）



今も燒く北支の民窯（其四）

山東博山窯

吉田璋也



一、托盤、厚い下手な大皿である。白掛けした上に、藍で花が描いてある。多くの物は魚が描いてある。お茶を盛つてお客を接待するに用ひてゐる。徑三〇糎

二、罐、浮模様のある上に釉が掛けて

三



どを入れてもよささうな壺である。口には木で栓をしてゐる。胴徑一八糎、高さ一八糎

四、缸、黒釉の下に紋様が浮き出してゐる。形もよく、日本人ならば花器に用ふるであらうが、麵粉其他の穀類を貯藏する壺に造られてゐる。口徑二〇糎、高さ三〇糎

五、水罐、古格のある壺である。色彩は黒。吊手に紐を通して提げたり天秤棒で水桶のやうに擔つて運ぶのである。徑一七糎、高さ二三糎



ある。形がなかなかよく雄大なる器である。臺所にあつて偉容を持つ。穀類其他の食料を貯へる口徑二三糎、高さ四〇糎

三、壺、黒釉の土瓶で、農民のお茶を飲む道具である。酒、醬油、酢な

二

五



四





青島海水浴場



北戴河海濱

回教及び回教徒

栗原清

بسم الله الرحمن الرحيم

北支回教徒に就いて述べる前に、回教とは如何なる宗教なりやの大體を、先づ明らかにして置かねばならぬ。

回教は、西紀六一〇年頃、アラビヤの一商人マホメットが、メッカの近郊にあるヒラーの洞窟に於てアルラーフの神の啓示を受け、その啓示に基づいてはじめて世界に宣言した宗教であつて、キリスト教、佛教と共に世界三大宗教の一つに數へられ、その中で最も新らしいものである。回教が一名マホメット教と稱せられるのは、教祖マホメットの名を取つたものである。

回教では、後述する如く、新約聖書及び舊約聖書に出て來るアブラハム、モーゼ、キリスト等をも、アルラーフの豫言者としてこれを崇めて居り、また教儀其の他に於ても、ユダヤ教、キリスト教と類似する點少くなく、回教の起緣上、これ等二宗教と兄弟關係にあることが、容易に察知出來る。

回教は、回教徒の最も重要視する「アルラーフの外に神なく、マホメットは其の使徒なり」の聖句によつても明らかな如く、「アルラーフ」を唯一絶對、無始無終、全智全能の神と信ずる徹底的な一神教であつて、從つて偶像崇拜は、回教の極端に忌避するところである。

同じく偶像崇拜を排斥しながらも、キリスト教徒は、キリストを神の子として崇め、マリヤ、十字架に對しても禮拜を捧げるのであるが、マホメットをさへ神と同列には置かない回教徒は、これをも明らかな偶像崇拜なりとして、嘲笑輕蔑するのである。

回教の正しい名稱は、アラビヤ語の「イスラーム」であるが、これは「アスラーマ」卽ち「歸依する」といふ語から來たものであつて、回教の根本要諦が、唯一神アルラーフに對する絶對歸依にあるところから、斯く名付けられたものとされてゐる。

アルラーフを全智全能の神と信じてゐる回教徒は、宇宙の森羅萬象凡てが卽ち日月星辰の運行はもとより、萬物の活動生滅に至るまで、その悉くがアルラーフの支配下にあることを固く信じ、從つて彼等は、生前、アルラーフの啓示を集錄せるコーランの教に、絶對に違背なからんことを心掛け、死後、軈て來るべき最後の審判に於て、眞主の嘉賞に浴し、劫火渦巻く地獄に架せられた牛の毛の如き橋を無事に渡り了せて彼岸に達し、天國に於ける無限の幸を享受せんことを、日夜祈り求めて已まぬのである。

世界回教徒數は、既に一言した如く現在約三億强であるが、回教宣言後短日月の間に、斯くの如く老大なる教徒

內容

第四卷 九月號

を獲得し得たのでは勿論なく、今日まで波瀾重疊、幾多の苦難時代を經過して、遂に今日の隆盛を見るに至つたのである。

我々の看過してはならぬ回教に於ける顯著なる事實は、世界回教徒の共通的宗教語がアラビヤ語であり、世界回教徒の勤行が、整然と統制されてゐて國別により言語別によつて、差異の存しないことである。

即ち、北支回教徒の誦唱する經文はアラビヤ回教徒の唱へるそれと全く同じであり、禮拜に際しての、沐浴の方法順序も、禮拜の方向も、また儀式的身振りも寸分の違ひは無いのである。

從つて、北支回教徒もアフリカ回教徒もトルコ回教徒も印度のそれも遍く初めて一堂に會して、一絲亂れざる禮拜の儀式を嚴修することも、可能なわけである。

世界回教徒の有機的連結性も、其の根據は、斯かる點に存するのである。

中國回教徒

回教徒が、初めて中國に移住し來つた時期については、未だ明確にされてゐないが、大體唐初のことであつて、其の徑路は、陸路は新疆方面より、海路は印度洋南洋諸島よりのと二つがあつて、史上屢次に亙る迫害殺戮に遭遇しながらも、回教本來の面目を失ふことなく、教徒は漸次増加して、現在では約三千萬の回教徒を擁するに至つてゐる。

そして其の分布狀態は、華北に一千萬、西北に一千萬、其の他に一千萬といふのが、今日の常識となつてゐる。華北では、河北省河南省が最も多く、山東省山西省が之に次ぐ。西北では、陝西省、甘肅省、寧夏省、新疆省、青海省が回教地帶であり、就中新疆省はその住民の七割以上が回教徒である。西北の五馬聯盟は、夙に人口に膾炙するところである。中南支方面では、雲南省が最も多い。

中國では、回教は通常「回教」「回回教」と呼ばれ、回教徒は「回回」時に輕蔑して「回子」と稱せられるが、教徒自身は、回教を「清眞教」「伊斯蘭（イスラム）教」、教徒を「ムッスリム」「伊斯蘭教民」又は單に「教民」「穆民」「在教」とも稱してゐる。

回教の「回」字の起源は、今のところ明確な解答はない。

回教徒は、回教の特質上、禮拜寺（清眞寺）を中心に密住して居り、一ケ村悉くが回教徒を以て占められてゐる例も少くなく、又回教徒の見られぬ大都市は殆んど無い。

北支回教徒の信仰

回教教義の主體をなすものは、三つある。「信仰」と「勤行」と「戒律」とである。

苟も回教徒たるものは、嚴格に此の三者を完修せねばならず、三者のうち其の一つを怠つても、彼等の最も忌諱するところの眞主アルラーフに對する裏切り者、即ち「不信者」となり、死後、地獄に墮ちて劫火に燒かれねばならぬ。

從つて、眞主アルラーフの嘉賞に浴するためには、教徒は、コーランの定むるところに從つて、「眞主」「天使」「預言者」「コーラン」「來世」「天命」の六つの信仰を基とし、此の信仰を完全にするために「擧意」「禮拜」「齋戒」「施捨」「巡禮」の所謂「五功」の勤行を嚴修し、更に日常生活、殊に生業上食物上に於ける「戒律」を嚴守せねばならぬとされてゐる。

北支回教徒の信仰は、長い間に環境の影響を受けて、支那化したる點無きにしもあらずとは云へ、本質的には、右の教律に從つて各自の信仰生活日常生活を規制しつつあるのであつて、殊に食物上の戒律、就中「不食豚肉」の如きは、老幼男女の全教徒によつて、嚴格に守られてゐる。

一　六　信

(イ) 眞　主（アルラーフ）

回教の神は、既に述べた如く、獨一無二、無形無相、宇宙萬物の創造者にして全智全能なる「アルラーフ」であつて、北支回教徒は、これを「眞主」「眞宰」或は單に「主」とも稱してゐる。

教徒は、

「アルラーフは至大なり、我はアルラーフを措きて崇むるものなきを誓ふ」また

「アルラーフの外に神なく、マホメットはアルラーフの使徒なり」

といふ聖句をアラビヤ語で誦唱しつつ、眞主の唯一絶對なることを信じ、他の如何なる神をも否定するのである。

回教の根本義が、「眞主」に對する絶對歸依にある以上、個人の物質的肉體的利福の祈願は、これを許さるべくもないのであるが、北支の禮拜寺に、時に「有求必應」の扁額が掛けてあつたりするところを見ると、彼等の「眞主」に對する信仰に、功利的打算的な點があることは否定出來ぬ。從つて中には、希求するところを「眞主」に祈願し續け、遂に御利益を得るに至らなかつた場合、「眞主」賴むに足らずとして、禮拜を怠るに至る不屆者が出て來るのも、異とするに足らぬわけだ。

(ロ) 天　使（マラーイカ）

コーランに

「眞主と其の天使と其の聖典と其の使徒とを信ず、諸々の天使の間に差

別を置かず」

とある如く、回教では、アルラーフの神に奉仕する多數の天使を認め、これを信仰する。

北支回教徒は、天使のことを「天仙(テエンシエン)」と稱してゐる。

天使は光を以て創造され、男女の性別がなく、中でも次の四天使は最も貴いとされてゐる。

即ち、一はジャブラーイル（眞主の命を受けて、マホメットに啓示を傳へたる天使）二は、ミーカーイル（事物の日常的行程を司る天使）三はイスラーフィル（最後の審判に喇叭を奏する天使）四はイズラーイル（死を司る天使）である。

其の他天使の數は非常に多く、人間を守護し、また其の善行や惡行を記錄する天使もゐる。

北支回教徒の間では、人間の善行を記錄する「天仙(テエンシエン)」は右肩のあたりに何處かに、惡行を記帳する「天仙」は左肩の何處かにゐるとされ、死後秤(はかり)にかけられた際、善行の多いものは右肩が下り、惡行の多いものは左肩が下つて、これについて人間は絕對噓がつけない仕組になつてゐると信じられてゐる。

これ等の天使は凡て、常に人間の行動を監視してゐて、教徒の信仰生活を督し、人間を善行へと導く天使達である。

(ハ) 豫言者（ナビンイ）

回教は天使同樣、多くの豫言者（實に十萬以上の）を認めてゐるが、その諸々の豫言者中、マホメットを以て最大且つ最後の豫言者なりとする。

北支回教徒は、マホメットを「至聖(ヂーシヨン)」「聖人(ションレン)」又は「欽差(チンチヤ)」と稱し、「マホメットは眞主の使徒なり」の信仰は、絕對である。

(ニ) コーラン

コーラン、正しくはクルアーニは、眞主がマホメットに與へた啓示のすべてを集錄したものであつて、回教徒にとつては、千古不磨の大典である。

教徒の信仰生活及び公私の社會生活は、凡てコーラン及びマホメットの言行錄であるスンナーテによつて規制されて居り、これから逸脫することは、絕對に許されぬ。

コーランは、三十卷百十四章六千六百十六節三十二萬三千六百七十一字より成り、其の節數は、新約聖書の三分の二である。

北支回教徒は、コーランを普通に「可蘭經(コランチン)」と書き、また「聖典(ションテエン)」「天經(テエンチン)」とも呼ぶが、これを非常に神聖視して常に上座に置き、沐浴するに非ざれば之を手にせず、又捧持する際には、腹部より下には決して下げない。

北支でも凡てアラビヤ原文のものを用ひて居り、最近、コーランの漢譯が出版されてゐるが、一般教徒にとつては無緣な存在を續けてゐるやうだ。

(ホ) 來世（アヒライテ）

來世とは、現世に對する死後の世界を意味し、また後世、末世とも稱せられる。

回教の來世に對する信仰は、我國佛教の淨土眞宗のそれと、頗る相似の點があるが、これは或意味に於て、回教信仰の中樞を爲すものと云へる。人間の生活は現世限りのもので、回教徒は深く來世を信ずればこそ、ひたすらアルラーフを念じ、五功を嚴修し、戒律を固守して、驚異的な克己生活を營んでゐるのである。

回教の說くところに依れば、來世は天國と地獄の二つに分れ、天國は無限の幸福に滿ち充ちた樂園であり、地獄は永劫の火炎燃ゆる苛責の世界である。人は死後、アルラーフの前で最後の審判を受け、善人は天國に上り、惡人は地獄に墮(おと)されるのである。そして豫言者マホメットは、その最後の審判に於て、眞の信者のために辯護者となるのである。

北支回教徒の信ずるところに從へば最後の審判が行はれるのは、太陽と地球とが衝突して萬物が絕え滅んだ後のことで、從つて既に現世を去つた人々は、墓場に在つて靜かに、最後の審判を知らせる天使イスラーフィルの奏する喇叭の音の聞えて來るのを待つてゐるのである。

然し回教は、現世と來世とを判然(はつきり)と區別せず、現世は其の儘來世に續き、來世に於ても現世同樣、精進と修行とに努力せねばならぬ。來世の精修によつて、現世の惡行を輕減消滅することが可能だからである。又地獄の責苦もそれが教徒である限り、永久のものではないと說かれてゐる。

(ヘ) 天命（カダル）

北支回教徒は、救ひ難き宿命觀を抱

いてゐて、時々刻々に進歩向上しつつある周圍の事物に眼を被ひ、これに適應順化することを頑なに拒み續けて、科學文明の遙か後方に取殘されてゐるのであるが、その由つて來る原因は、天命に對する誤れる信仰にあると云へる。

從つて人間には創造性など全然あらう筈はなく、普通に所謂創造とか創作とか云ふことも、身の程知らぬ不信者の僣稱に過ぎず、神に對する冒瀆である。

斯くて彼等は、アルラーフの神に絕對歸依すると共に、前記の如き救ひ難き宿命觀に陷らざるを得ない。

マホメットは、希望なき宿命觀に陷るを戒めて、人事を盡くして天命を俟つことが、回敎の說く天命の本義であると說いてゐるのであるが、北支敎徒のそれを檢討するに、漢人の所謂「沒法子」式心理と抱合して、極めて消極的運命觀に終始してゐる。

2 五　功

(イ) 擧　意（シャハーダ）

擧意とは、敬虔なる誠心を眞主に捧げる意味で、敎徒は

「アルラーフの外に神なく、マホメツトはアルラーフの使徒なり」

といふ聖句を、アラビヤ語で誦唱するのである。

此の聖句は、回敎信仰の根本をなす最も重要なものであつて、何か大事に遭遇せる場合、敎徒は之を口唱するのである。例へば人の臨終が近づいたとき、本人又は他人が代つて、これを唱へる。

また敎徒が、何かの事情で眞の回敎徒なりや否やを疑はれた場合、此の聖句を唱へて敎徒たる證となすことがあるのであるが、此の聖句の誦唱が、回敎信仰上如何に重要なる地位を占めてゐるかが分るだらう。

(ロ) 禮　拜（サラーテ）

禮拜は、回敎徒の最も重大なる勤行の一つであつて、回敎徒の所謂聖戰に際して、禮拜を以て降服者の改宗の證據となした程である。

凡そ回敎徒たるものは、コーランの定むるところに從つて、一日五回一定の時刻に、卽ち天明前、正午過ぎ、日沒前、日沒直後、夜、の五度に亙つて必ず禮拜を行はねばならぬ。この一日五度の禮拜を、夫々パンターチ（晨拜）ペシーニ（晌拜）チィカール（晡拜）シャーム（昏拜）ホーフータン（宵拜）と呼んでゐる。

また一週間の中の金曜日は、キリスト敎に於ける安息日（日曜日）と同じく、回敎徒にとつては特に神聖な日であつて、此の日の正午過ぎの禮拜卽ちペシーニには、日頃は仕事の都合で禮拜を怠つてゐる者も、必ず禮拜寺に參集してこれに加はらねばならぬ。

北支回敎徒は、金曜日を「主麻日」又は「聖日」と稱し、此の日のペシーニを「聚禮」又は「主麻」と呼んでゐる。

禮拜の前には、必ず沐浴を行つて身心を淸淨にし、淸潔なる衣服を身に纏ひ、淸らかな場所を選んで（金曜日は禮拜寺）正しき方角（西の方、正確に云へばメツカのカーバ神殿）に向ひ、所定の一聯の儀式的身振りによつて、いとも嚴肅に禮拜の勤行を修めるのである。

禮拜の時刻は、太陽によつて左右され、そして太陽は、一定の時刻には必ずしも一定の位置にあるとは限らないために、地域によつて差異があり、季節によつて相違するわけである。

金曜日の聚禮には、禮拜の始まる一時間程前に、役僧が觀月樓に上つて

「……いざ禮拜に參ぜよ、いざ禮拜に參ぜよ……」

と、禮拜の時刻の來たことを敎徒に告知する。敎徒は此の聲に應じて續々禮拜寺に參集し來り、沐浴室で沐浴を行ひ、禮拜堂に入つて、靜かに禮拜開始の時刻を待つ。禮拜開始に先立つて、阿衡の簡單なる說敎があり、終つて禮拜に入る樣になつてゐる。

禮拜前に行ふ沐浴は、大淨と小淨の二種類に分れてゐる。前者は、房後、夢精、遺漏、月經後、產後等に於て、頭の頂から耳穴、鼻穴、爪先までの文字通り全身を淨めることであり、後者は、顏、頭、手足、陰部等を洗ふことである。

マホメツトは沐浴に關して

「淸淨ならざる者の禮拜は、決して神に聽かるることなし」

と說いてゐる。

沐浴は、身心の汚穢を淨め、邪念を去るためにする嚴肅な行であつて、單なる形式的なものではない。

從つて、沐浴に用ゆる水には細心の注意が拂はれて居り、その水を汲む井戸には特別な裝置が施してある。若し誤つて汚物が井戸に入つた場合には、水が淸淨になるまで、これを汲み出して了はねばならぬ。

淸淨なる水が得られぬ場合には、淸淨な土又は砂を以てこれに代へることが出來るが、これは回敎が、水少き砂漠の地アラビヤに生誕した宗敎であることを思へば、自らうなづけることだらう。

沐浴後、大小便した場合、血や膿が出た場合、瘋癲に罹つた場合、又眩暈睡眠放屁等を催した場合には、折角の沐浴も其の效果を失ひ、初めから沐浴をやり直さねば、禮拜は出來ぬことになつてゐる。禮拜中笑つた場合も同樣であるが、欠伸は構はぬらしい。

禮拜に著用する衣服は、淸潔なものでありさへすれば其の如何を問はぬが血や膿や糞尿等の汚物の附著したものは、絕對に許されぬ。禮拜寺の便所に時に二、三尺の竹筒を具へつけてあるのを見るが、これは尿水が飛び散つて、衣服を汚さないための用心である。これは日常も守られてゐることであるが彼等は用便汁、小便汁を絞り出して、其の後を左手で（回敎徒は左手を不淨の手としてゐる）叮寧に紙で拭ふ。

それ程の回敎徒が、人前も憚らず、キュツキュツと手鼻をかむのは、どうも筆者等の腑に落ちぬところだ。

沐浴が終ると一般敎徒は、普通に禮拜帽と稱せられる特別の帽子を被る。

（北京あたりの回教徒は、大體白い帽子を被る）

阿衡や海里凡等の教職にあるものはタスタールと稱する五尺餘の白布を頭に巻きつけ、其の端一尺五寸位を背に垂れ下げる。

禮拜に唱へる經文や、禮拜及び沐浴の方法順序等については、紙幅の都合上ここでは割愛する。

㈧ 齋　月（ラマザーン）

回教暦の第九月は、嘗てマホメットが、メッカ近郊ヒラーの洞窟に籠つて天啓を待ち、遂に眞主よりコーランの啓示を受けるに至つた神聖な月であつて、此の一ヶ月間、教徒は義務として斷食を行ふ。

北支教徒はこの第九月を「齋月」又は「把齋月」と稱し斷食の行即ちサウムを、「把齋」又は「齋戒」といふ。

齋月中三十日間は、朝は東天の白む前から、日沒後西天の陽光消えて星明りを見るに至る迄の間、教徒は單に飲食物を絶するのみならず、此の月を汚すやうな行爲は、一切愼しまねばならぬ。卽ち諸々の邪念を却け、一日中身心を淸く正しく保持して、教祖マホメットの難行苦行を忍ぶと共に、過去を反省して罪業の消滅を祈らねばならぬのである。

然し旅行や病氣等の已むを得ない事情のために、斷食の行を守り得ない場合の起つて來るのは當然であつて、人人は其の樣な場合、斷食を行ひ得なかつた日數だけ、後で補足して行はねばならぬことになつてゐる。

この斷食の行は、北支教徒の間にも驚ろく程普遍的に行はれて居り、男女共十二、三歳以上のものは、誰でも守つてゐる樣だ。

今年の齋月は、丁度夏にかかつてゐるので、一ヶ月の間、水を口に含むことは許されても、これを飲み下すことの許されぬこの行は、相當の苦行であるに相違なく、それにも拘はらず、老幼の回教男女によつて、嚴格に修行される事實は、我々にとつては正に驚異でなければならぬ。

元來齋月中は、業を休んで專心「行」に精進するのが建て前になつてゐるのであるが、北支の教徒は、平常と變ることなく生業を營みつつ、把齋するのが普通である。

然し斷食と云つても、一ヶ月の間、飲食物を全然口にせぬといふわけではない。日沒後及び早朝卽ち東天の白む前に、輕い食事を攝るのである。

㈡ 施　捨（ザカーテ）

施捨は、回教信仰に於て、禮拜斷食に次いで重要な地位を占めてゐる。ザカーテは、北支では「課賦」「損課」最も普通には「散課」「天課」と稱せられ、凡そ財産を有し、收入を有する者は、必ず其の幾分かを、貧者のため・神の道のため、旅人のため、其の他のために、施捨することが教徒の義務となつてゐる。

卽ち教徒にして、一定以上の財産を有し、收入を有する者は、その種類に應じ、夫々の率に從つて、毎年十二月末に、これを淸算しなければならないのである。

例へば貴金屬及び商品については、その$\frac{1}{40}$、果實や穀類については、その$\frac{1}{10}$、家畜については、牛は三十頭毎に一歳牝牛一頭、四十頭毎に二歳の牡牛一頭が賦課せられてゐる。夫々免稅點があることは、勿論である。

元來施捨は、現世に於ける私慾を抑制して罪業の輕減に資し、來世の幸福を祈るを主眼とするものであるが、他面同胞相憐み相扶けて、貧者の缺乏を補ふと共に、富者の財を減じて貧富の懸隔を少くし、以て平和な生活を營ましめんとの意圖も含まれてゐることは云ふまでもない。

一般回教徒は他の中國人によつて、「窮回回」と蔑稱されるのであるが、彼等が窮回回たるに至つた有力な原因の一つに、施捨の誤用があつたことは否むことの出來ぬ事實である。

施捨の誤用とは

1 貧しい一般教徒の間に、自ら働かずして人の懐を當てにする惡習慣を釀成したこと、

2 假令施捨が行はれるにしても、各人が別々に而かも小出しにし、零細を合して巨大となし、これを教徒全體の發展向上に資すべき公共機關や社會施設の設置に使用するといふやうなことが、餘り無かつたこと

などを指していふのである。

㈥ 巡　禮（ハッジ）

毎年一回、回教暦の第十二月に、サウディ・アラビヤの首都メッカに於て

回教の大祭が盛大に行はれる。

メッカは、回教の發祥地であり、教祖マホメットの生誕の地であり、且つ回教の靈場であるカーバ神殿の所在地であることは、既に述べたところであるが、回教徒たるものは、少くとも一生に一度は、此の地に行はれる大祭に參加せねばならぬ義務がある。この巡禮を果すと、教徒はハッジの稱號を許され、一般教徒の尊敬を受けるやうになる。巡禮は、數多く行へば行ふ程功徳になるとされてゐる。

回教隆盛時代に於ける巡禮者の數は年々六十萬を下らなかつたと云はれてゐるが、其の後世界的不況に禍されて、昭和十三年には、僅か十萬に過ぎなかつたのである。

カーバ神殿は、北支教徒の間では、「天関朝堂」(テンチエンチヤオタン)とも「天房」(テンファン)とも云はれ、彼等が西を向いて禮拜するといふのも、このカーバ神殿が、北支からは丁度西の方にあるからに外ならない。從つてアフリカに在る教徒は、反對に東の方を向いて禮拜せねばならぬ道理である。

事變勃發以後は、巡禮の道は全く鎖されてゐたのであるが、昭和十三年十二月、中國回教總聯合會(在北京)の後援の下に、北支回教徒五名が、英米の種種なる妨害の手を排撃しつつ、事變後初めてのメッカ巡禮を敢行してゐる。

3 戒律

回教徒が、絶對に「不食豚肉」であることは、我々日本人の間にも可成り廣く知られてゐるやうだが、豚肉以外の肉、例へば牛や羊の肉だつたら、文句なしに喰べるだらうし、從つてこれ等の肉については、何の不都合も起らないだらう位に、單純に考へてゐる人が非常に多いのは遺憾である。

知らなければ知らない儘に濟まされる事柄だつたら、筆者は遺憾に思つたりなど決してしないのであるが、このことについて無智なために、我々と回教徒との間に、不祥なる問題を惹起する可能性が十分にあるし、事實、單に表沙汰とならないだけで、現に其の發生を見つつあるのであつて、其の故にこそ、斯くは歎ぜざるを得ないのである。

回教律に於て、食物に關しては、ハラール(如法即ち合法)とハラーム(不如法即ち大禁)とが定められてゐるが、教徒が食餌とすることを堅く禁じられてゐるものを列擧すれば、

(イ) 豚肉(支那語では猪肉(チューロー))
(ロ) 肉食する鳥獸の肉(例へば虎、豹、狼、犬、鷹、鴉等)
(ハ) 馬、騾、驢
(ニ) 病死乃至自然死(老衰死した)鳥獸の肉
(ホ) 動物の生血
(ヘ) 鱗の無い魚類(鰻、鯰、鱔魚(シャンユイ))
(ト) 酒、煙草、阿片
(チ) 回教の定めたる法式によらずして屠殺されたる鳥獸肉
(リ) 異教徒の手によつて調理せられたる飲食物

等であつて、豚肉は勿論のこと、たとへ牛や羊の肉でも、回教の法に從つて屠殺されたものでない限り、豚肉同樣、その不可なることは、これで明かになつたらうと思ふ。

回教徒は、豚肉や法に依らざる鳥獸肉については、これを食はないどころか、手を觸れることはもとより、眼にすることさへ異常に嫌惡する。

回教徒に非ざる者が、豚肉を擔いで回教部落の近邊を通行したために、何處へ行つたものやら未だに歸つて來なかつたり、何氣ない風で、豚の油を携へて回教徒の店舗へ入つたのが知れて、血腥い風が吹いたといふやうな事件が、枚擧に遑ない程數多くあるのであるが、以てその一般を知るべきである。

從つて、日本人だからとて、回教徒にとつては同じく異教徒である以上、此の禁を犯した場合、此の種の事件が發生しない道理はないのであつて、回教徒に接する場合、我々のくれぐれも注意を要する點である。

「不食豚肉」は、北支教徒の間では、殆んど例外なく嚴守されてゐる。

酒や煙草の禁は、敬虔なる教徒の間では、やはり嚴格に守られてゐるが、不敬虔なる者でも、人前では、殊に他の教徒の居る前では、絶對にと言つてもよい程に愼んでゐる。

異教徒殊に一般漢人の手になれる飲食物は、見向きもしないのが普通である。

我々は中國の到る處で、飲食店や旅館や其の他各種の店(屋臺店まで)の至極人目につき易いところに「回回」とか「清眞」とか又は「清眞回回」「清眞古教」とかの標識が掲げてあるのを見るのであるが、それは回教徒の經營する店であることを示すためのもので、異教徒の調理したものを禁ずる戒律に由來するものである。

回教徒のみが使用し、異教徒の侵害を絶對許容せぬ(從つて紛爭の種となり勝ちな)屠殺場が各所に存在することも、推して知るべきである。

尚一般教徒の住宅には、門口の上部に、アラビヤ文字の標識(紙に印刷したものもあれば、金物に印刻したものもある)のが普通であり、正月に春聯を貼らない回教徒の家の入口は、一般漢人のそれに見なれた眼には、どことなしに綺麗な感じを受ける。

北支回教徒と禮拜寺

回教寺院は普通清眞寺と稱せられ、日常會話上に於ては、教徒も教徒に非ざる者も、單に「禮拜寺」(リーパイスー)と稱してゐる。例へば、北京牛街(ニュウチエ)にある清眞寺を牛街禮拜寺(ニュウチエリーパイスー)と呼ぶが如きものである。

教徒と禮拜寺とは、彼等の宗教生活上密接不可分の關係にあつて回教徒の在る所必ず禮拜寺が建立されてゐる。

主麻日(金曜日)の聚禮を宗教的義務として課せられてゐる教徒は、當日の禮拜後、種々の世間話に打ち興じたり、情報を交換し合つたりすることも出來るわけで、此の點回教徒にとつては、禮拜寺は一つの樂しい集會所でもある。

禮拜寺は、多くの場合、教徒の淨財

の喜捨によつて建立され、數年乃至十數年間に亙る喜捨の集積によつて爲されることもある。

從つて禮拜寺の位置は、何れの家よりも參集するにも都合がよく、之れ等の宗教上の制約にも叶ふ場所が選定せられ、若しくは禮拜寺を中心にして、教徒の住宅が集まることになる。故に禮拜寺の建立の年月並に建築の規模等によつて、教徒の聚落狀態、經濟狀態等を察知することが出來る。

禮拜寺の施設は、禮拜堂を中心にして、沐浴室、教長室、海里凡室、事務室等よりなり、其の他觀月樓、學校等の附屬設備があつたりする。

(イ) 禮拜堂

教徒は普通「大殿（ダーデェン）」と稱し、凡て東向きに建てられて居り、中に入つて、入つた方向に正面すれば、直ちに西方卽ちメッカの方向に向ふやうになつてゐる。

(ロ) 附屬建物

附屬建物の位置は、特別の規定があるわけではないが、普通禮拜堂を中心にして、其の前方の左右兩翼に附設されてゐる。

教長室は、應接間位はついてゐるが、海里凡室の如きは、彼等の起居の用を足すに過ぎない。

(ハ) 觀月樓

所謂光塔（ミナーレット）であつて、叫拜樓（チャオバイロウ）とも云ふ。役僧が此の上に上つて、禮拜の時刻の來たことを教徒に告知することは既に述べた通りであるが、此の塔の上から月を觀て（時計の無かつた昔を想像せられよ）、齋月の始終の日を定めるところから、此の稱がある。

因に、回教徒の一日は、日沒時から始まる。

北支に於ては、觀月樓を有する禮拜寺は少い。

(ニ) 教　職

元來禮拜寺の教職にあるものは他の宗教に於ける僧侶とは甚しく趣を異にし回教では僧俗の區別は無い。

また教職にある者の數も少く、一禮拜寺に一人の阿衡（アーホン）數名の海里凡（ハイリーファン）が居るのみである。

○阿　衡

阿衡は阿訇とも書き、教長のことを言ふのであつて、教徒の信仰生活の領導者である。

阿衡は、寺の鄕老會議により、大抵三ヶ年間の契約で招聘せられる云はば雇傭者である。從つて其の地位は、頗る不安定と云はねばならぬ。

然しながら、阿衡は、回教の性質上極めて重要な地位にあつて、教民の信仰生活を指導するは勿論教徒の日常生活萬端について、良き相談相手ともなり、良き指導者ともならねばならないのである。

阿衡なしには教徒の結婚はもとより、極樂往生も不可能で、從つて其の詮衡には、極めて愼重を期する。

○伊馬目（イマーム）

阿衡の次位に位し、寺内の總務を司る。

○海里凡

回教學僧云はば阿衡の卵を云ひ其の資格は、回教小學校等に於て其の基礎アラビヤ語を學んで多少其の基礎を有し、檀家に獨りで出向いて讀經することの出來る十六歲以上のものである。其の古參者は、教務に於て阿衡を補助する。

○寺使夫

下級の讀經者で、寺院内の雜役に從事する。

○其他カンソアープと稱するものがあつて、家畜の屠殺を役目とする。

結　語

以上述べ來つたことの外に、例へば漢人と回教徒との關係とか、中國回教徒の歷史とか、その風俗習慣（冠婚葬祭）とかの、多くの重要部面も殘つてゐるのであるが、それ等は本稿のよくするところではないので、次の機會に讓ることにする。

最近、卑劣なる野望達成のためには鬼畜に等しき手段をも敢て辭せぬ共產黨は、回教徒を裝うて回教寺院に入り込み、これを彼等の赤化工作の根據となして遂に我々をして手入させるやうに仕向け、それによつて我々がさも回教の迫害者であるかの如く宣傳し、以て回教徒と我々とを離間せしめんとする、姑息陰險なる術策を弄しつつあると聞くが、さもありなんことである。

これは今後、我々が無益有害なる努力を避けるためにも、細心の注意を要するところである。

我々の先人は、宗教問題解決のために、悲痛極まりなき苦杯を嘗めてゐる。それは外でもない。寬永年間、切支丹禁制に端を發した彼の島原の亂である。この亂に於て、幕府の嚴酷なる改宗の命に從ふを肯んぜず、殉教者として甘んじて死に就いたもの、二十七八萬を下らなかつたと云はれてゐる。

中國回教徒三千萬と雖も、これに對するに道を失せば、彼等は自ら進んで殉教者たるの道を選ぶであらう。

人及び物の一切を擧げて、大東亞共榮圈確立の世紀的大事業に邁進しつつある現在、我々の祖先のこの苦き經驗を徒爾ならしむべきでないことは、論を俟たぬ。

この教訓を生かすに我等の誠心を以てすれば、中國回教徒三千萬は、自ら進んで我々の力强き協力者となり、剿共の第一線に立つて勇戰奮鬪するに至るだらうことも、期して待つことが出來るからである。

（筆者は中國回教總聯合會調査室主任）

印度人の心を摑んだ回教

K・R・サバルワル

イスラム教（回教）は今日人類諸人種の中に現存する一大勢力であり、佛教も基督教も其の最も盛んな時代に於てさへこれ程の勢力を持つた事は無かつた。イスラム教は今も昔も其の信仰の單純さ、其の生活の素朴さで人心をとらへてゐる。マホメットの教が其の教徒に授けた人類兄弟觀の偉嚴と共通の禮拜とは全イスラム教徒を一つの精神的大家族の樣に互に緊密に結びつけた。どんな奇異の感も彼等を隔てず、どんな人爲的不平等も彼等の社會組織や交際を傷ふことは無いのである。

イスラム教の他宗教徒を改宗させる力は驚くべきものであり、又其の信徒の心を把握する力はそれにも增して眼ざましいものである。一度イスラム教徒となつた國民が其の宗教を捨てたと言ふ例は歷史を通じて見あたらない。スペインのムーア人達の場合の如き、根絶されはしたけれども、根絶は棄教ではないのだから。歷史の皮肉と言はうか今もモロツコに住むムーア人達の中には、往古彼等の祖先達がスペインで住んでゐた家々の鍵をいとも大切に保存してゐる——いつか歸鄕して再び其の戸を開ける日の爲に。

イスラム教の此の極端な粘り强さ、握つたら離さない此の能力、之が一度足場さへ得れば直に「唯一の神、人類兄弟觀、唯一の信仰」と言ふ教義になるのである。

イスラム教は人類兄弟觀を現實化してゐる、單に公言するだけでなく、社會的にも國際的にも實踐してゐる。モロツコから中華民國へ、南アフリカからロシヤ、中央アジアとイスラム教の世界何處へ行つても、イスラム教徒同志を隔絶する何の種族的、人種的、階級的障害も見出さない。祈りの時には最も偉大な統治者も彼のどんな賤しい召使達とでも並ぶのである。又全會衆が二列三列以上になつた場合、一國の主權者と見らるる人たりとも自分で選んで第一列に行く樣な事は出來ない。

寺院（モスク）内でばかりでなく社會に於ても人と人との間に何の差別も認めない。食卓や宴席では貴族高官といへども彼等の召使と一つの卓につく。基督教では司教だけが聖なる勤行が出來るが、イスラム教では信者は誰でも進み出て會衆の祈禱を司會する事が出來る。印度でも又今急速に崩潰しつつある英國の東洋諸領土でも基督教會堂の前列の席は皆白人信者の爲に豫約され、後の方の席だけがエスキリストの東洋人信者の分と言ふ事になつてゐる。

印度の殆ど各都市に普通二つ別々の基督教徒墓地がある、一つは白人信者の爲、も一つは印度人信者の爲。まるで神は此の異なつた人種の爲二つの異つた天國、二つの異つた地獄を作り給うたかの樣に、或は又神は白人墓地には白い砂を撒き、印度人墓地には茶色の砂を滿し給ふかの樣に。一方イスラム教徒の墓地では大帝王達が賤民共と並んで其の永劫の眠りについていられるのを見る——かく神の御眼には全イスラム教徒は同等であり、最後の裁きの日には同じ列に立つのであると言ふ思想を暗示しながら。

イスラム教では男子はどの樣な女とでも結婚出來る、若し双方が同意するならば。イスラム教の帝王達の中には、其の女奴隸と結婚し、女王として取扱つた例が澤山ある。基督教ではかかる結婚を禁じはしないが、然し其の

社會ではかかる貴賤結婚を何となく嫌な醜いものとして見下す。印度では由緒ある富有な家庭の娘達が、イスラム教には階級的偏見のない事を感じさせる爲にイスラム教への新改宗者達に其の社會的地位を度外視して結婚させられるのを筆者は自身見て知つてゐる。

各イスラム教徒は生れながらの布教師で本能的に彼等の信仰をイスラム教徒でない隣人達に布教する。改宗者は息子か兄弟の樣に歡迎し、自身の血統はどうであつても、又、一歐洲人がうまく言つた樣に、「改宗者が黑人であつても、支那人でも印度人でも、或は又歐洲人であつてさへ、何の躊躇こだはりもなく其の子女と結婚させる、そして彼を完全に、率直に、決定的に、此の世界で最も排他的な團體の中にはいらせる。」

印度を四世紀間以上統治したイスラム教徒ムガール王朝時代、貴族は所領のある爲の貴族ではなく全く其の人の偉さによる貴族であつた。偶然の生れのよさで決められたので無くて、人格の力、個人の才能、遭遇する人生の諸機會によつて決定された。西洋のとは根本的に原理が異なつてゐるのである。西洋の貴族の最も重要な點である世襲がイスラム教に無い事は極めて顯著な事である。歐洲では長子たる事が貴族の相續系統を決定した。然しムガール王朝時代の印度では貴族は世襲では無かつた。凡ての他の個人的叙勳と同樣に貴族の位は個人でかち得ねばならなかつた。ムガールの貴族は、貴族の子たるが故の貴族と言ふのではなくて、王樣が彼の偉勳によつて選び給うた爲になるのであつた。故に一家の譽は長く續かなかつた、だから過去の夕闇の中に由緒をたどる事の出來るムガール王朝の貴族は殆どなかつたのである。

一方、ムガール諸帝王は穩當な氣持を持つておはさなかつたわけではない。亡くなつた貴族の成年の子息等には人生發足への導きを與へ、時には貴族階級の最低階級を與へられた。かくて彼等は其の經歷を自身で築き上げるに充分の機會を與へられたのである。

豫言者マホメットはかう言はれた事がある IN NAMA ANA BASHAR UM MISLUKUM（私は貴方と同樣にただの人である）。かう言ふ風に彼は其の光輝ある例を其の信徒に示した。彼の人格は淸く、無垢であつた。彼の家、着物、食物、凡て非常な素朴さの特徴があつた。彼は同席者から如何なる特別の尊敬の印も受けねば、自分で出來る事は召使の世話も受けない程氣取り氣がなかつた。度々彼は自身の食物を市場で自身買つてゐるのを見受けられた、度々部屋で自分の着物を繕ひ、中庭で山羊の乳をしぼつてゐるのを見受けられた。誰でも、何時でも彼に近づく事が出來た。病人を訪ねては同情した。限り無く、慈悲深く寬大であり、同時にイスラム敎團の安寧に心を盡した。各方面から降る程の贈物があつたが、彼が此の世から姿をかくした時は殆ど何も殘つて居らず、殘つたものも皆其の信徒に殘したのであつた。

「御主人樣に私が御奉仕するより以上の奉仕を御主人が私にして下さるのが常でした」と豫言者の召使の一人は言つたと言はれてゐる。

KANUN NAS UMWATAN WAHIDUN（人道は一國を形成する）と言ふのが聖なる經典の敎旨である。故にイスラム教は現存の諸宗敎の中で、眞實の萬民平等の實行基礎を與へるものである。されば白人の侵略主義の蹄の下に幾世紀を苦しんで來た內部アフリカでは、現在イスラム教は黑人の希望と救ひの使として驚くべき發展をなしてゐる。「イスラム教に比ぶれば基督敎の宣傳は神話の樣なものだ」と一英人視察者は書いてゐる程である。

（筆者は華北交通資業局員）

回教諸都點描

スタムブール——カイロ——ヂエルサレム——ダマスカス

中平亮

スタムブール

コンスタンチノープルは三區から成つてゐる。主要トルコ人區（スタムブール）は、金角灣を距てて居留民區（ペラ）と相對し、その亞細亞側の對岸にスクタリがあり、以上三區を總稱して、本來の創建者である東ローマ帝國皇帝コンスタンチヌス大帝に因みコンスタンチノープルと唱へてゐたのであるが、第一次歐洲大戰直後、ケマルにより完全に自權が恢復さるるに及び、前述主要トルコ人區の名稱を取り上げスタムブールと改稱した（首都はアジア・トルコ——アナトリア——の奥地アンカラに移した）

ビザンチン文化の名殘りを止むると共に、五百年に亙つてトルコ帝國の首都であり、特に回教教主（カリフ）の所在地として全回教國に向け、威令を傳へてゐた關係上、外觀的に見て回教都としての相貌の整つてゐる點では世界第一である。

林立するモスケ（回教寺院）——これは前記三區中、殆んどその全部が、スタムブールに集中されてゐる。

スタムブール區は、急斜面をなしてその斜面に建ち並ぶ家々は、屋根と屋根とが層をなし、その上にはほぼ等間隔に並ぶ寺々の巨大な圓屋根（ドーム）が、四つの土筆形の圓塔（ミナレット）に護られて、どつしりと落付いてゐる。この幻想的雄大な外觀は天晴れ聖都の名を辱かしめぬ尊い姿であつて、世界に於ける美觀の一つに算へられてゐるのは決して偶然でない。

×

ある金曜日の午後、聖ソフイヤ寺に向つて、私は、若葉のスタムブールを歩いた。街は狹くて穢くはあるが、いやに四角張つた洋館がなく、古びた家家の壁はよく新綠に調和し、スタムブールの若葉はヨーロツパ人區のペラよりはずつと美しかつた。

金曜日は回教國の日曜である。

店は全部閉つてゐても、春の光に浮かされて當もなく歩いてゐるやうな人達で往來は可なり賑やかであつた。麻地に赤や黑の模樣を浮かばせた襯衣を上衣の下から覗かせて、カラをつけずに歩いてゐる若者達は、如何に此の市がヨーロツパ岸にあると云つても、アジアの市たることの爭はれぬ證據を示してゐた。

頭からすつぽり黑布を被つて、まるで袋が歩いてゐるやうな恰好をした婦人達（但しこの服裝は今ではスタムブールでは見られなくなつた）は、アジアの色調を更に一層濃厚ならしめる。

併し、これ等の人々に混つて、服裝はトルコ式でも、餘程ヨーロツパ化したスタイルをし、而も元來黑であるべきその着物も樺色やオリーブなどの華美な色に代へ、顏のヴエール（チヤドオル）も外した娘達が、若い男の視線を聚めてゐるやうなのも見受けられた。その他、頭から足の先まで同じ衣裳を着せた二人の妻君を從へて悠々肩で風を切つて行くエフエンヂ（旦那）もゐた。

若葉に繞まれた聖ソフィヤの觀は、如何にも爽々しいものであつた。

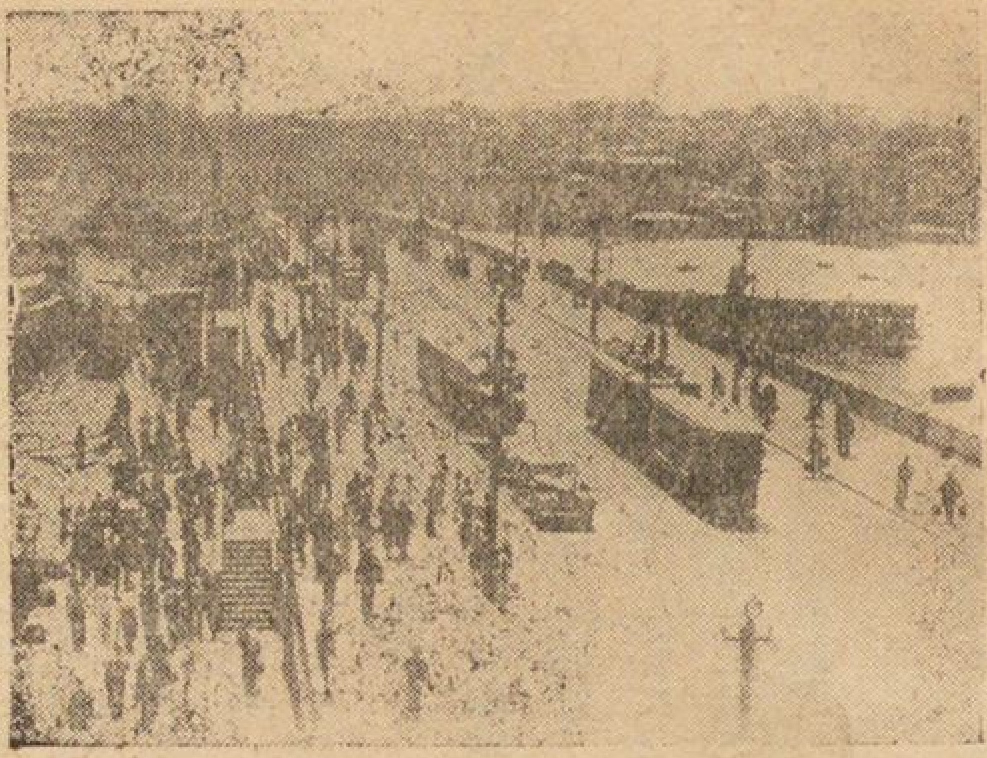
寺門を潜ると午後の太陽の透いて通る小さな綠の葉の間に、淡紫色の花房を垂れた藤棚の下に、ささやかなカフエーがある。藤棚を天井として並べられた椅子の上には赤いトルコ帽の善男が集り、新聞紙を擴げてゐるのもあれば、ソーダ水のサイフオンへ長い護謨紐を付けたやうなもの（水煙草）から頻りに煙を吸うてゐるものもあり、春の倦怠に誘はるる儘に居睡つてゐるのもあつた。

お寺の壁に沿うては、手洗の前に齋戒沐浴する人々が踞んで、默々として頭と手と足を洗つてゐる。

×

金曜日の聖ソフイヤの禮拜は午後一時に始まる。優に五千人を容るるに足る堂内には、大勢の宗徒が床の上に敷き渡された絨緞の上に坐つて、薄暗い大廣間の大半を滿たしてゐる。

新に這入つて來るものは、入口で靴を脫ぎ、それを提げたまま先着の人に並んで一列になるやうに着坐する。此の場合とても帽子は脫らないので、あの赤いトルコ帽がずらりと並んでゐるのは壯觀である。併しその帽子に白や黃色の布片を卷きつけてゐるのが半數位居る。これは敎徒としての身分を示すもので、例へばメッカ巡禮を終つたものは青布を卷くといつた風である。



金角灣を跨ぐガラタ橋から見たスタムブール

四つのミナレツトに圍まれた寺々がほぼ等間隔に羅列する。スタムブールの眺めは世界に於ける美觀の一つにかぞへられてゐる。

堂内に入ると、着坐する前に立つたまま二回上身を低く屈めてお辭儀をし次に坐つて日本人が叮嚀な挨拶をするやうに手を突いてお辭儀をする。勿論神樣に對してするのであるが、彼等はこの時、メツカに向つて坐つてゐるのである。そして坐るのには胡床をかいても、日本流に畏まつて坐つても勝手である。

ユスチニアン大帝の命により、東ローマ帝國各地から聚集された著名な廢墟の貴重な石材と、カリストス、ヤソス、シナイの各地から送り届けられた一粒選りの靑、桃色、黄色など、様々の大理石をもつて、二人のギリシヤの建築師の設計になつたビザンチン建築技術の最高峰も長い年月の間には、その光輝を失ひ、壁も柱も黒ずんで、堂内は陰氣で薄暗いが、只正面の色硝子の窓から射し込む明りと、天井の小窓から落込んで來る光線とで、微かに保たれてゐる明るさは、人々の心を落付かしむるに充分である。ほの暗い天井には僅かに殘つてゐる金泥が、あるかなきかに閃めいてゐる。

正面の右手には、ささやかな堂宇があり、それに隣つて階段がある。この階段の上には燃ゆるやうな緋の絨緞が敷かれ、その上に靑い衣の導師が立つてゐる。導師の左手斜正面には大理石の棧敷があり、棧敷の上にも、又その下の細長い支柱の間にも、坐つた人々でぎつしりと滿されてゐる。これだけの莊嚴さは勿論、これだけの美しい場面は、歐洲一流の歌劇でも恐らくちよつとは見られまい。

靑衣の導師は、肺腑から絞り出すやうな鋭い悲痛な聲で、或は唱ふ如く、或は祈る如く、又或は怒號するが如くお經を誦するのであるが、前方に坐つてゐる連中が、時々鈍い聲で之に和する。その間、棧敷の上にも僧がゐて、階上の導師に答へるかのやうにお經を誦する、一般の宗徒もまた低い聲で時時之にベースを入れる。

最後に導師は、階段を降りて宗徒の先頭に坐して更に讀經を續ける。その間、禮拜者は導師の誦する句節、句節を合圖として、一同一齊に起ち、一齊に坐り、又兩手を耳にあてて一齊にお辭儀をし……その樣子は全く集團體操その儘である。

聖ソフイヤは、前述の通り、東ローマ帝國の遺産であるが、トルコが此處を占領して以來、回敎寺院として接收されたのである。

内部の裝飾は勿論改められたのであるが、外部は古いままで殘つてゐる。

只一つ變つたところは、四隅に立つ土筆形のミナレツトであるが、これは凡ゆる回敎寺院共通のものであり、夜はその上部に燈明が點ぜられ、朝夕に此處に立つて行はれる讀經の聲が近隣一帶に響き渡るのであるが、これは寺院數の多さと其の配置の關係により、全市隅々にまでも及び、恐らく回敎圈廣しと雖もこのスタムブールに優るものはないであらう。

カイロ

アフリカと云へば到る處に猛獸毒蛇の住み家のやうに思ひ

込み、ナイルの河縁に行けば、鰐が泳いてゐるとさへ考へられ勝てあるが、カイロへ着いて實に堂々たる新式のホテルに送り込まれ、その餘りにも歐化された文明都市カイロを眼のあたりに見せつけられると、誰しも且つは驚き且つは失望をさへ感ずる程である。事實、停車場から新市街へかけては、その身がアフリカに在るといふことが嘘のやうに感ぜられるに相違ない。

新市街の大通り、カメル街などに至つては堂々たる大都會の風貌を備へ、實にヨーロツパの大都會と少しも違ふところがないのである。

其處には宏大なデパートがあり、エレヴエーターは頻りに上下し、最新流行を身に裝うた美人が、美髯の紳士に擁せられて品物を獵つてゐる。その前には芳香高いフランス製の化粧品が並べられ、「メード・イン・イングランド」の毛織物があり、「リーアル・ジヤパニース」の縮緬が陳列されてゐる。

併しながら、斯くも歐化された素晴らしい建物と建物との間、その奥の方からは純エヂプト式の建築が覗いてゐたり、或は大佛のやうな巨像が見えるかと思ふと又或る處にはお寺の圓屋根が半分見えたりする。

往來も又、黒光りのする贅澤な自動車の後から驢馬の尻に跨がつたトルコ帽が續くかと思ふと、又その後からエヂプト人の葬式の行列が悠暢な御詠歌を唱へながら練つて行く。

全く何等の調和も脈絡もなく、到る處に混淆してゐるヨーロツパと東洋との對照が甚だ面白い。

×

聖ソフイヤがスタムブールを代表するものとすれば、モハメツト・アリ寺は、正しくカイロを代表するものである。

カイロの南端、ヌビア沙漠のモカタム山脈が、ナイルの低地に突き出た、その先端に建てられたこの寺は、隨分遠方からでも望むことが出來るのである。

特に磨きあげられたやうな蒼空に聳ゆる其の圓屋根と尖塔が、強烈な斜陽に照り輝く時、それは世にも有難く、また尊い眺めである。

新市街の公園エズ・エズベキエから直線的に南下してゐるモハメツト・アリ街を下ると、宏壯な城塞に行き當るのであるが、これは現王朝の始祖、モハメツト・アリガの創建にかかるものであり、廓内の寺（現在ではモハメツト・アリ寺と呼ばれてゐる）は祖國トルコのヌリ・オスマニエ寺（スタムブール）に模し、ギリシヤ人の名匠の手で建てられたものである。從つてこの寺院は普通の寺院とはいささか趣を異にし、一般大衆のためのものではなかつたはずである。

門を潜ると廣大な中庭である。細長い廻廊に圍まれた此の庭は、一面に石灰石で敷き詰められてゐる。素地が純白でないこの石灰石は、淡藍色の條脈が通つてゐるため、廣大なこの庭を一體に灰色に見せてゐる。此の色彩が强烈な太陽の光線を極度に和らげてゐるので、夏の日の午後でも、森閑とした空氣の中に何處となく冷たい落付いた氣分が漂つてゐる。

庭の中程に亭のやうな恰好をした大理石の手洗がある。これは趣意に於て我國の神社の手洗に相當するものであるが、規模の上では比較にならぬ程派手なものである。

回教寺院には、必ずこの手洗が附きものであるが、その或るものはお寺の外壁に附屬し、或るものは斯く獨立してゐる。その大理石の手洗の前に、眞紅のトルコ帽や、純白のアラビア帽が相並んで踞み、齋戒沐浴してゐる眺めは宛然一幅の繪を見るやうであり、回教寺院特有の景物である。

お寺の内部は、何の奇もなく妙もなく、コンスタンチノーブルの寺々に較ぶれば、頗る平凡なものであるが、この寺院に就ては特に機を得て特別參觀したことがある。その光景を回顧してみることにしよう。

×

階段から入口まで、燃ゆるやうな緋の絨緞が敷き詰められてあつた。宮殿の中に這入つて、幾つかの壯麗な部屋を通つて、スルタン一族の拜殿に達した時、神祕はその高調に達した。薄暗いその部屋に敷き詰められた絨緞の上に、丈の低い二臺の机が並べられ、その上に肉筆で大きく書かれたアラビア文字のコーラン經が開かれてあつた。右の机はスルタン、左の机はスルタン妃のためである。

その正面の一段高い靈壇の側には、數個の銀の燭臺の上に燭光が淡く輝き華やかな絨緞に照り映えてゐた。その燭光の及ばぬ隅々の暗がりには、アラーの影が動いてゐるかのやうに思はれた。

更に大禮拜堂（これは一般人も觀覽が許されてゐる）には、天井から雨のやうに垂れてゐる長い紐の先に一つ宛豆電球が結ばれて、暗黒色の絨緞の上に輝いてゐた。その光で天井裏に描かれた唐草模樣の中に置かれた黃金色の

薔薇の模様が微かに認められた。元來この電球は回教のラマダン（斷食祭）の夜だけ點ぜられるものであるが、此の時は特別に點ぜられたのであつた。

私達は、その中を歩きながら、黄色の理脈の通つた不思議な大理石の壁を撫でながら驚異の眼を瞠り、拜殿の一隅に今も尚眠つてゐるモハメツト・アリの石棺の前に立つて敬意を捧げた。

お寺の裏庭に出て、旅行者は終生忘れることの出來ない莊嚴な夕景の大パノラマを見た。遙か向ふにはナイルの流が黒ずんだ椰子の木の間に銀色に輝いてゐる。河を隔てて椰子の樹の遙か向ふには二つ並んだ小さな三角形が紫色に見える。云ふまでもなくギザのピラミツドであるのだ。そして眼下の屋並の上には圓屋根（キユポラ）や圓柱塔（ミナレツト）が柱のやうに並んでゐた。

ヂエルサレム

パレスタインは、人類最古の歴史に繋がつてゐる。

聖書の出エヂプト記に、モーゼがイスラエルの子孫を引連れて、エヂプトから北上したと傳へられ、「乳と蜜の流るる地」といふのがこれである。

東ローマ帝國の始祖コンスタンチヌス帝の母后がクリストの出産地、十字架につけられた場所、墓地などの檢分にヂエルサレムを見舞つてから、クリスト教徒は聖地巡禮のため續々として此處を訪れることになつた。

その後、トルコ族（セルヂツク・トルコ）がこの地を侵略して巡禮に危害を加へるやうになつた時、それが理由となつて前後七回、百七十五年に亙つて十字軍の遠征が行はれ、ヨーロツパは始めて實際上東洋に接觸した。

ナポレオンのインドへの進軍が阻止されたのもここだつた。

クリミヤ戰爭も聖地に因む爭ひが原因であり、第一次世界大戰中、イギリス軍がエヂプト、アラビア人の援助により、トルコ人とこの地を爭つた。現在では、アラビア人はイギリスを後援とするユダヤ人とこの土地を爭つてゐる——。

「乳と蜜の流るる地」といふは、恐らくジョルダン河溪谷を指して云つたものであらう。モーゼに率ゐられた少數の部族にとつては狹いあの溪谷にしても、十分生活は支へられ、又虐げを受ける異民族もゐなかつたであらうが現代の旅行者の眼から見れば、パレスチナとは石の多い禿地が、ところどころ橄欖の淡緑に染められてゐる處と云ひたい。ヂエルサレム附近一帶の風光はその代表的なものである。

地理的に云へば、ヂエルサレムは、ゲツセマネの園で有名な橄欖山麓のうねりの上を蔽うてゐる。停車場を降りてオリーヴの樹が處々赭土の禿地の上を灰綠色に彩つてゐる處を爪先上りに辿つて進む時、やがて壯大な城壁が晴渡つた蒼空を、くつきりと凹凸型に切りとつてゐるのを見る。そしてその上には處々寺々の塔が突き出てゐる。

×

ヂエルサレムの建物は殆んど全部が石で出來てゐる。この地は雨量が尠く用水に乏しいところから、家々の屋根は平になり、そこで捉へる雨を中庭の溜池に導く仕掛けになつてゐる、家はその中庭を廻つて建てられてゐる。

就中、特色のあるのは路地である。其處には路上に漆黑の蔭を落す橋形の洞門が數歩毎に架けられてある。それは僅か一、二間の幅のものであるが、兩側の家々の石壁を足場として、同じく石で築かれたこの洞門は、トンネル形に路次を蔽ひ、數限りなく續いてゐる。此等洞門の或るものには、天井の上に部屋があるらしく、壁際に窓のついたのもあるが、あるものは洞門といふ程でなく、單なる橋のやうに渡されたのもある。

夏は暑い土地のことて、日光を受

第一書房
今月の新刊

☆新秋の讀書季に贈る第一の巨彈として**鶴見祐輔氏譯『プルターク英雄傳』**全四卷（各册一圓五十錢）が刊行されました。英雄傳中の古典として不動の地位を占むるもの**第一卷武將の卷**は、アレキサンダー、シーザー、アルシバイアディーズの壯大な戰ひの一生を述べて全篇息をつかせぬ。なほ鶴見氏は今回出版の爲、全體に決定的改譯を施して在來と面目を一新した。
☆**山田靈林氏の『禪學夜話』**（一圓三十錢）は禪的努力によつて皇國民としての自覺を深めよと說く名著。近日賣切れの模樣です。
☆その次に御報告したいのは**岡田正三氏譯**になる**『プラトン全集』全十二卷**（各册三圓）の出版です。この世界的大思想家に今こそ私たちが接しなければならない時が來ました。譯者岡田正三氏はプラトン研究に一生を捧げてゐる篤學博識の學徒。**第一卷內容**はエウチプロン、ソクラテス、クリトン、パイドン、エウチデモス。この十二卷全譯の完成こそ思想日本の誇るべき文化的收穫でありませう。
☆その他、**五島茂氏著『新しき短歌論』**（一圓五十錢）並びに**常本憲雄氏著『空觀哲學』**（三圓八十錢）が新刊となりました。各〻讀み應へのある勞作であります。

けてゐる部分は火のやうに輝き、蔭の部分は漆のやうに暗い。

頭から足の先まで黑一色で包まれた——後から見ればまるで黑い袋が歩いてゐるやうに見える回敎徒の女も、赤いトルコ帽を戴き、ワイシヤツを長くしたやうな白衣を纏つたユダヤ人も、頭に肩の邊りまで垂れる白布を被り、その上に黑蛇が二重の輪になつたやうな冠を戴き、夏でも陣羽織のやうな上着を着た精悍そのもののやうなベドウイン（遊牧アラビア人）も、この路次を步く限り、誰彼の差別なく、この明



西アジアの回敎國では珈琲は生活必需品であり、劇場でも寄席でも珈琲（アラビヤ・モッカ）を喫む。寫眞はバグダッドのカフエ、給仕人でも客でも女氣は全然見當らない。

暗を潜らなければならない。

この縞蛇を横たへたやうな路次の兩側は色の褪せた石の壁であり、路面は擦り減らされた凸凹の石疊であるが、總じて云へばこれは東部地中海沿岸の都市の典型であり、中世紀の原型を保持する都市ほど、この形態を完全に保有するものであつて、ヂエルサレムはその代表的なものであるといふことが出來る。

云はば迷路に近いこのヂエルサレムの巷路を氣分に委せて步いてゐるうち偶然にも有名な「涙の石壁」に行き當つた。

そこには一群のユダヤ人が、高い石垣に向つて熱心に祈つてゐた。

ソロモンが建てた神殿の一部であるといふこの石壁は、高さ十間、幅二十數間、巨大な石灰石で築かれてゐる。三千年の歲月を經たその大石は、苔は生えねど色は褪せ、その上に刻まれたヘブライ文字も、風雨に削られて消えかかつてゐる。此の壁から數步離れてそれより一段低い今一つの石垣が相對してゐる。そして行當りも壁だから、ここは深い谷底のやうな氣持がする。

ユダヤ人は、每日午後三時過ぎから此處へ來て、高い方の壁に向つて祈を捧げる。ここに集つてゐた人々は、黑いガウンを寛く着流し、鏡餅に緣を附けたやうな帽子やトルコ帽を戴き、揃ひも揃つて頰髯のある男とロシヤ百姓女のやうに白い頰被りした女達であつた。これらの人々は孰れも祈禱書を手にして、小さい聲で祈つてゐた。女の中には壁にぴつたり身を寄せてゐるのもあつた。その日は折惡く月曜日であつたが、ユダヤ人の日曜に當る金曜には祈禱者は更に多く、靑や紫や金茶のガウンがその中に混り、導師の先唱する祈禱のコーラスが聽えるといふ。

×

要するに、パレステイナ、特にヂエルサレムはユダヤ民族にとつては切つても切れない關係にあることは疑ひもないところであるが、と云つてアラビヤ人を無視して差支へないものであらうか。

一例をオマール寺にとる。

八角形のこの寺は、起源に就て云へば、餘り古いものではないが、それにしてもビザンチン建築技術の產物であり、新らしいだけに華麗ではあるが、何といつても容積が狹く、內部での禮拜が出來ない。この點、格式の高い回敎寺院としては型破りであるが、問題はその中に圍まれてゐる大龜の這つてゐるやうな巨岩である（これに因んで岩の殿堂（ドーム・オブ・ロック）とも呼ばれる）。

この大岩は、ソロモン時代より犧牲を献ぐる祭壇であつたらしく、ユダヤ人間には、エホバの契約の櫃に關聯して、此の上もなく神聖なものとされ、これに就ては尋常一通りならぬ因緣が結びつけられてゐるのであるが、回敎徒によつても同樣に靈場であり、ソロモンの建てた神殿は形骸さへも留めてないにも拘らず、サラセン帝國、ウマイヤ朝時代の建築がこの場所を占有してゐるのである。

ダマスカス

ダマスカスは、アブラハムに關聯して舊約聖書に記されてゐる。

エジプトのメムフイス、メソポタミアのニヌア、バビロンがまだ微々たる存在であつた時代に、既に大都會として繁昌してゐたのであるから、世界最古の都會であることは疑ひがない、而も歷史に記されてゐる古都の殆ど全部が今や消えてしまつて跡方もなくなつてゐるか、或は廢墟となつてゐるに拘らず、ダマスカスだけが生き殘つてゐるのである。とは云ひながら、今日のダマスカスは、最早アブラハム時代のものではないのは勿論のこと、ビザンチン時代のものですらなく、サラセン

時代の面影すらも完全には止めてゐない。併しそれにしても、京都が大阪、東京に較べて遙かに典雅であるやうに同じ回敎都であるコンスタンチノープルに比較して、ダマスカスが斷然光つてゐるのは間違ひないところである。と、いふとコンスタンチノープルから抗議を喰ふかも知れないが、コンスタンチノープルの美觀は、何と云つてもエメラルドを湛へた海峽の水とその上から觀た寺々の輪奐である。

ところで、その寺々の並んでゐる市街に一歩足を入れるなら、直ちに幻滅してしまふのであるが、サラセン帝國ー前ウマイヤ朝の首都として、アラビア風に改造されたこの都は、小さいながらも整つてゐて、雅致を失つてゐない。

ブルヂョア住宅區の如きは、建築樣式こそ違つてゐるが、歐洲の大都會に持出しても決して見劣りのしないもので、これらの家々には、世界文明都市の煖房用スティームのやうに、冷水が壁から壁へと匍ひ廻つてゐて、寢室、中庭には必ず噴水がある。

アラビヤ帽を戴いた老人などが、天井の明取り、壁際の窓から微かに洩れてくる薄暗い光線を浴びて、この噴水の前で、コーラン經を讀んでゐる風景などは、棄て難い趣きである。

又、崩れかけた塀際のやうな、何の意味があるかと思はれるやうな處にさへ、噴水が勢よく迸つてゐる。かうした水利の技術はダマスカス特有のものと言はれてゐる。

この水は夏のダマスカスの暑氣を對象とする場合、一段と生きてくるのである、緯度の上では、カイロに較べて餘程北に振つてゐるのであるが、暑さの程度は決して劣らない。

カイロ同樣、午後になると、四時頃までは、街路には殆んど人影を見ない。喘ぐといふ言葉はこの場合決して誇張でない。この暑さでは、水はただ見るだけで此の上もなく有難いものである。

太古に發生したダマスカスが、現在まで存續してゐるのは、このお蔭である。トルコにしてもすでにさうであるが、パレスタイン、シリア、イラクに至つては完全にアラビア沙漠の延長である。

若しも沙漠に泉があり、潺々たる流水があるならば、大概の場合、そこが遊牧民の本據となる。若しその場處が交通の要路に當つてゐるなら、陸續として集つて來る隊商は必ずそこに都市を出現せしむる。ダマスカスも亦さうして生れた都會なのだ。

そこで若し水が盡きると、その都會の存在はその時限り、意義のないことになる。沙漠の都會は水に生れ、水に滅ぶ。然るにダマスカスには、レバノン山脈の前山アンテイ・レバノン山脈から、西方アテベエ湖に注いでゐる流れが幾筋となく市中を貫いてゐる。

太古から流れ流れて盡きることのないこの水のお蔭で、ダマスカスは現在まで生き永らへてゐるのである。

尙、この水は約一里の厚さで市の三方を圍んでゐる果樹園の中を網の目のやうに流れて、種々雜多な果實を市民に提供してゐる。

ダマスカスは、又美人の產地として有名である。但しこれはアラビア人でなしに、謂ゆるシリア人である。——中央亞細亞の民族に回紇（ウイグル）といふ民族がある。これはシリア人を根幹とするもので、彼等より分派したものであるが、シリア人に特に美人が多いといふ理由は、恐らくアレクサンダー大王の遠征に遡るものであり、十字軍その他、入り代り、たち代りこの土地に侵入して來た歐亞各民族の血を混へた結果であり、それによつて、美人を產することとなつたものと思はれる。それは「ハレム」に世界各國の女を養つてゐたコンスタンチノープルに美人が多く、歐亞民族の接合地、カウカサスが美人の產地であるといふ點から考へても自ら頷かれるであらう。

×

總體、回敎國都市には、やたらにカフエーが多い。これはヨーロツパのカフエー（我が國のは勿論）とは、全然違つたもので、カフエー專門の純喫茶店である。

回敎國は他の世界に比較して餘程閑人が多いと見え到る處の都市都市には我が國のカフエー氾濫時代を想はす以上に軒を並べてゐるのであるが、そのカフエーには晝間でも一杯客が詰つてどろどろした本物のアラビア・モッカを啜つては、水煙草を吹かしてゐる。

面白いことには、この地では寄席でも、客席はカフエー式に椅子、卓子を並べて客は舞臺に面した一角だけ空席にして三方を取圍み、モツカ珈琲を啜り、水煙草を吹かしながら見物する。この式の寄席は、イスタムブールでも見たことがなく、ダマスカスで始めて見たものであつた。

寄席といつても、演出物は舞踊だけで、アラビア式の笛と太鼓の奏樂に合はせて、アラビア獨特の舞踏を演ずるのである。——總てがハレムの延長らしい。（筆者は華北交通資業局員）

東城記一

加藤新吉

去る五月十日以來、東城に假の住居を定めることになつた。東城には住みたくないと實は內々考へてゐたのであるが、思ふやうにならぬが世の中である。

北京は內城と外城とに分れる。明清時代には五城十坊に分けたと謂ふ。中城、中西坊と中東坊。東城、朝陽坊と崇南坊。南城、東南坊と正東坊。西城、關外坊と宣南坊。北城、靈椿坊と日南坊。五城には正副指揮を設け巡城御史が之を統べた。禁裡は之に與らず。內城は兼ねて步軍統領にも屬した。清朝の入關後は更に八旗を內城各地に配した。清朝末期に警察制度を布き、前制を廢して若干區に分けた。民國十六年之を內城六區、外城五區に改めた。

內六外五の區制は今もその儘行はれてゐる。だから正しくは北京內一區北總布胡同十號と私の今度の住居は呼ばれるのである。が、東城北總布胡同で通る。東城、西城の稱呼は、その指す區域は漠然としてゐるのであるが、今でも普通語として使はれる。それに次いで北城の稱呼もないことはない。南城は文語としては兎も角、普通語としては存在しない。中城に至つては、寡聞にして耳にしたことがない。

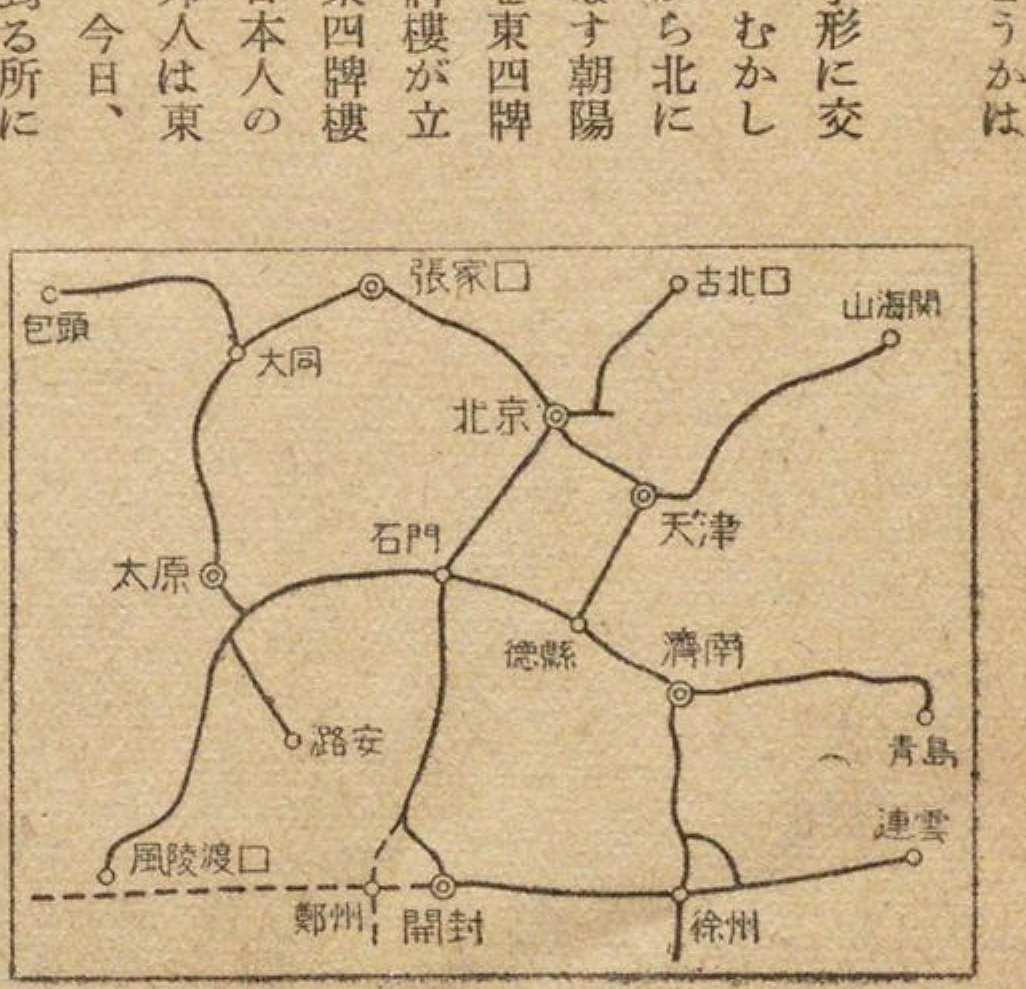
內一區は內城の東南角に當る。內城の正門正陽門と紫禁城の正門天安門とを結ぶ線以東、內城の東門朝陽門から西へ走る朝陽門大街及猪市大街以南、ただし紫禁城を含まず、それが內一區であり、大街に依つて自ら三分されてゐる。すなはち、崇文門大街によつて東西兩部に分れ、西部はまた東長安街によつて南北兩部に分たれる。

內一區は謂はゞ外國人の巢窟みたいな所である。東長安街以南は交民巷、北清事變の最終議定書に依つて設定された大公使館區域、大東亞戰爭勃發と同時に、年久しく飜つた米英の旗と、肩で風を切る米英駐屯軍とは消えてなくなつたが、なほ北京にして北京にあらざる一區劃である。その北、紫禁城の東に隣る區域を南北に貫く王府井大街は北京第一の商店街、店といふ店が悉く橫文字の看板を揭げてゐた。これまた大東亞戰爭以來大急ぎでその橫文字を削り去り塗潰し去つたが、果して眞に歐米依存から脫却したかどうかは判らない。

崇文門大街と東長安街と丁字形に交はるところを東單牌樓といふ。むかし單牌樓があつたと聞く。そこから北に伸びた大街が內一區の北邊をなす朝陽門大街と十字に交はるところを東四牌樓と謂ふ。今も美しい四つの牌樓が立つてゐる。而して東單牌樓と東四牌樓とを結ぶ線及其東側の胡同は日本人の巢窟である。明治以來の在留邦人は東單牌樓を中心に住んだと聞く。今日、十萬を越す在留邦人は內外城到る所に住んではゐるが、それでもこの一帶が日本色最も濃厚である。尤も平日には商店とか料理屋とかいふものだけしかめだたない、ではない、料理屋、小料理屋、喫茶店、カフエーといつたものがめだち過ぎて變な氣がしないでもないが、祭日ともなれば、そこらぢゆうに日章旗が飜つて大いに人意を强くするのである。

皇紀二千六百年代の初、大東亞戰下に於けるこれら在留邦人がいかに生活しいかに御奉公してゐるか、人あつて正しく書きつけて置いて吳れたら歷史的記錄になるだらうと思ふ。

（筆者は華北交通資業局長）



昭和十七年八月十五日印刷納本
昭和十七年九月一日發行

九月號（每月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 （東京）（一〇四）小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 古川一郎
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替 東京六四二二三番
電話九段（33）一四一五番 三三四四番
會員登錄番號 一一六五〇八番

一册定價㊕三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九番地 日本出版配給株式會社

昭和十[illegible]年[illegible]七月四日第三種郵便物認可 昭和十七年八月十五日印刷納本 昭和十七年九月一日發行（毎月一回一日發行）第四〇號

北支 定價 三十錢